

---

# 硝子玉の栞箱

雨原媽流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

硝子玉の琴箱

### 【Nコード】

N5137G

### 【作者名】

雨原媽流

### 【あらすじ】

今まで私が書いてきた詩をひとまとめにしています。日常を切り取ったものから、幻想的なものまで色んなものを書いていく予定です。

## L i g h t S t a t i o n (前書き)

漢字変換できるもの、誤字じゃない？というものが多々あります。

∴が、敢えてそのまま載せています。

## Light Station

YENやDOLLAR それだけじゃ飽き足らずEUROまで  
変わってしまった 今じゃ海辺に散ってる砂が金貨のホームタウン  
商人はてっとり早い商売でひともうけ  
かといってアクドい奴ってわけでもない  
助けを求める声を無視できず、手を差し延べてしまおう正直者

この街に住んでるのは自分だけじゃない  
左右にもわんさか 人がいんだよ

街を照らすは光 人々の心の月明りにもなってるそんなまるで造ら  
れたよな街 Light Station

始終ウワサはきいてる 貧しき子らに恵み与える商人がいるという  
ことは

1から10へ 今じゃ皆が皆、繋がりがあってる永遠のユートピア

悩める小羊には愛の手を、

平和と平等が基本理念のこのホームタウン  
余所という犯罪なんて 滅多にや起きない  
争いが嫌いな奴らばかりだから当然と言えば当然か

街に住んでる連中の数は誰にも分からない

街に差し込む光 そのものが希望を背負っている命の灯がたえず消

えぬ街

L i g h t  
S t a t i o n

## White Snow

季節外れの雪を待つ 月明りの下

願っても雪は降らず、幼子の涙が川となる

大人の理不尽な都合で 少女は病室という檻の中

どうしてこんなにも 雪に焦れるのか

心に問うも 宛はなく

KEEP OUT! 見えていたけど

この際 どうでもいい

禁じられし 戸を開け放ち

風に乗る、少女は駆け上がる

切に願ったから、せめてこの目で

でも そうは簡単に叶わないみたい

無垢の白じゃなくて 無知の白

季節はとうに冬 けれど降ってくれる兆しもない

どうしたんだろう この晴れやかな気持ち

そろそろ追ってくるかな…

TIME OUT! わかっちゃいたけど

一目見たかったんだ

夢をひと斬り 汚れた世界にはないってさ

もうどうにもならないくらい 汚染されてたみたいだ

TIME OVER わかったからここから離れることにするよ

来るのが遅いんじゃないか？

飽き飽きしたよ　こんな場所にもう用はない

嘘の顔で引き止められても　心が動くとも思っているの？

勘違いしないで　私とあなたは同じじゃない

ひねくれても汚れてはいないと思えるから

戻れと言うなら　戻りましょう

心は荒み　愛を無くし

緑を奪い　鉄で待ちを包み

絆を切り　自分を見失い　そんな今の時代を作ってくれた　前の時

代がやってきたのならば

50歩譲って戻ってあげる

最後に一言だけ

作ったものを壊すのは簡単　だけどね

歴史は永遠に壊せない

星がなくなるまで　何度も巡るの

土に溶け、少女は雪になる

LOVE SICK〜決意〜(前書き)

失恋とくるとシリアスに走ってしまいがち。  
恋を書きたいなあと思います。

次は明るい矢

LOVE SICK〜決意〜

決して気付いてなかったわけじゃない  
もう君が僕から離れてたことに  
気にしないで 僕には独りが合ってる  
そう 君が離れてくからじゃない

すっかり実ったと思い込んでた  
君があんまり大きく笑うから

出会ったばかりの頃を 過去にしてしまってた  
鮮やかな金魚を泳がせて 大きな瞳も泳がせる

今更のことでもうにもなりそうにもない  
ただ前のように独りになるだけさ

決して怒っているわけじゃない  
アイツの中に君がいるってことにね  
泣かないで 君を縛っておけなかった自分に腹を立ててるだけだから

君を困らせるつもりはないんだけど  
今だけでもいい 去り際だけでいいから笑っててくれないか？

今そのままを過去に してしまうから  
後ろをも振り向かないで曇った瞳なら見たくない  
次にもし 会える時があれば  
笑って過去の思い出にできるし

せめて君だけは晴れていてくれよ

なくしてはじめて思い返すよ

大都会のイルミネーション

一緒に見た朝焼け

僕だけが知ってる君の癖走馬灯のように巡る

すべて嘘だと思いたい

気持ちとは裏腹に 頭に入ってくる映像だけが僕に真実を告げる

嗚呼、わかってるよ

君には幸せになって欲しい

僕じゃない 誰かの手で 今この瞬間から誰かのモノ

マイナスに考えたくないから 別れはやめておく

さあ行こうか 別々の道を

僕の決意 それは前に進むこと

立ち止まっては いられないんだ

## 洋館のペルソナ・ヒューマン

怪しげな舞踏会で お目にかかるあの仮面  
目には見えないココロの中に あれがある  
街角にそびえる古い洋館 そこだけ空気が異様

主人は見てくれからしてミステリアス  
セレブ気取りで コインをちらつかせる婦人  
酒という酒をありったけ飲み干して高笑いしている  
この界限でも有名 ペルソナ・ビューティ―

夜を仕切る鳥たちもが恐れる ペルソナ・ヒューマン  
人気ひよけもないから 寄り付きやしない  
チルドレンが鏡見ながら 美粧なんかしてどうする？  
大人になりたいなら寝て待てよ

毎日がハロウィン気分美人を気取る3姉妹  
その下には弟2人 いたずらは家訓なのか…

昼間はスタンバイ中 忍び込むならその時がチャンス  
暴くまでは帰れないぜ

命さえ代価に そんなオレはビジネスマン  
裏を生きる強面も真っ青のペルソナ・ヒューマン狂気は2倍 より  
つかんとしてるオレは勇者だろう

しめた あの赤毛は弟だろう  
三つ編みのブルネットは妹か？  
こんな機会は二度とないやるなら今だ 今しかない

なんてあつけない

化けの皮剥がしたら 只の人だったなんて

眩まよい光を放つ宝石が人を狂わせるのか？

個性に自信を持ってないから皆均一の仮面を被れば安心できるのか？

欲が取り付いたブランドを体に取り込めば特別になれるのか？

まったくもって理解はできない

骨折り損ってこのことだな

上の奴等に報告しよう

彼らは特別な人間ではなかった

俺たちと同じごく普通の人間だったと

さっき会ったのに もう朝なんて早いね  
もう少ししたら 帰ろうか

心配しなくても夢で会えるから

ひとりきりになったとしても ふたりきりで

夢の中までは 誰も手だしできないだろうし  
そんな無言の権利もない

忙しくて満足いかないかもしれない 逢瀬の回数  
だからその分夢の中で話そう

「もう行くの？」 惜しむなんてらしくないよ  
またすぐ会えるんだからさ  
落ち込まないで 僕が悲しくなる

揺らぐなどは言わないよ 君も僕も人だから  
この世で揺らがないものはないって 知ってた？  
何でも知っていたいなんて エゴだろう  
恋人だからって僕にそんな権利はない

僕らはまだまだ子供で大変だけど きつと大丈夫  
忍耐がなきゃ 明日も明後日もやってはいけない そうだろう？

案外夢の中でさ 揺れてるのも心地いいもんだよ

どちらも僕にとっちゃ 現実なんだけど

夢の方がいささか現実的かもしれないね  
だから会えない時は 夢の中で話そう

愛してるはまだまだ遠いのかなあ？

言葉は知っているけれど よくわからないんだよ辞書で調べたって  
出て来るのはいつだって単語だけさ

もっともっと大きくなって

優しさと余裕が持てる大人になれたら…  
いつになるかはわからない 大人ってのは外見だけじゃないから

そしたら君に言うよ

ユーズドの誰も知ってる最愛の言葉を

だからそれまで 僕らが終わらないように

流行でいられますように二人だけの 二人のためだけの

## 裁判

小さな世界に漂う少年よ今日はあなたが犯した罪を知ってもらった  
めやってきた

黒の言葉で傷を作った深い傷は時が死んだ場所にてその身に降り懸  
かる

白い体を傷付けた黒い刃に残った血が貴方をこの世界に縛り続ける  
稚拙で奔放な行動は秩序を掻き乱し、あなたは贖罪という名の洋服  
を身に纏う事になる

破壊の末に得た幼き恋は隙間を埋めるように勝手に入ってきては、  
二度と乾かない後悔を連れて来る

誰が言ったのかは知らないが神は仏じゃない  
慈悲がないわけではないけれど、あなたが犯した罪を見過ごせるほ  
ど優しくはできない  
それでは死者を守れないでしょう？

さあ後悔を連れて一緒においで  
星を眠らせ 太陽を引き摺り 証人の月を呼んでこよう  
闇が雲を連れてきたら 開廷しようか

体と心の自由を奪う洋服は辛いでしょう？  
おまけに涙の石がくつついた指輪は終わらない苦痛を運んでくる  
皮膚とくつついた黒い靴はあなたがよく知る人達の憎しみの大きさ  
だよ

あなたは膝を折って涙の海を作る

その中に浸りながら言葉にならない謝罪の言葉を口にした

…そうその優しい一言が欲しかったんだよ

そのひとかけらだけでもあれば あなたはまた這い上がれるさ

誰が言ったのかは知らないが神は鬼じゃない

望むのならばあなたの手足にも光にもなるさ

## nameless breaker (前書き)

常日頃から私が少し思っていることを引っ張り出してきました。  
流行もいよいよけれど、その人なりの個性が残されててもいいんじゃないかな、と。

## nameless breaker

生まれついでの変わり者だから 今更何言われても動じない  
ちやほやされてるA級トレンドには溜め息ばかり  
だってみんながよつてたかったら 誰が誰なのか分からなくなるで  
しょう？

そりゃあね自己中に協調性ゼロじゃ うまくやってはいけない  
でも人に合わせることで 発信源のイイモノとやらにかぶりつくの  
はまた別物

新しい物好きな人達にはたまらない  
だからみんな 同じ顔に見えて仕方ないの  
最近大好きなあの人も どこかで目にした物ばかりで固めているか  
ら 名前すら忘れてしまいそうになる

消しゴムでこの世から文字が消せたらなあ…  
そしたらステータスになる名称が分からなくなるでも個性の名前も  
分からなくなる  
それじゃ意味ないか  
振り出しにお帰りなさい、だわ

悪いことじゃないけど いいことじゃない  
だから私はいつだって 好きなものを好きなだけ  
初めてのプレゼントに貰った名前  
短い睫毛に小さな目  
好きじゃないけど私だけのブランド  
スパイスはころころ変わるテイスト  
B級トレンドでお腹いっぱい

誰が何と言おうと 大満足よ

メディアのマリオネットにはならないで  
心が引っ張り出したトレンドで 作られるのはあなたというただひ  
とつのブランド

## 瞳の中の小部屋から（前書き）

タイトル決めるまで eye space というのがあがってましたが、今の形に落ち着きました。

まあどちらにしるあまり変わらないのですが（笑）

## 瞳の中の小部屋から

突然の別れの言葉に 戸惑いを隠せなくて 涙を落としていたね  
今日から罅<sup>ねぐ</sup>は君の瞳にするよ

荷物のことなら心配ない筆筈に本棚 布団とか

入るスペースなんてないし今の僕には必要ないからどうだっていいや

雨を吸い込むコンクリートみたいに 君の悲しみを取り除けたらいいのに

僕には実体がないから 抱き締める腕さえ持っていない

美味しくはないけど 食事は心の涙のレシピをいただこうかな

今はまだ棘で痛いだろうけど ゆっくり元気になって

僕の声聞こえないだろうけど 傷が癒えるまでは君の中にいるから

自分の都合でかかってくる 深夜の電話にさえ愛想のいい君

君とは正反対のタイプの新しい彼女が出来たとか 電話口で言っていたね

無理に笑顔を作って また新しい傷口が開いて涙ひとしずく

彼の為に 泣いているの？

まだ錆び付いたりリングを置いたまま

彼への気持ちは 生きているんだね

でもその指輪をつけないのは 始まりが永遠にないことを知っているから？

どちらにしる聞きたくはない

また君が悲しむから

どうして僕は 実体を持つ権利を持てなかったんだろう

僕なら彼より…なんて そんなこと許されない  
思いが通じた時 痛い思いすること知っているから  
だから僕らは この位置がいいんだ

優しい君を きつと優しい人が見つけてくれるよ  
だからそれまで 僕はここにしよう

## s i g h t (前書き)

機械と人間のお話です。ダークから抜け出そうと思い、○作目…  
次こそは！

あれはだめ これはだめ  
じゃあ僕はどうすれば？

抑圧されて15年

僕はとうとう泳ぎ方を忘れてしまった

羽を生やした怪盗が水を盗んだってんで 代替品を探している  
行き着いた先は 機械の支配

先生は機械化したモンゴロイド・ソルジャー

今や彼らに 人形のように操られている

乾いた砂の上に築かれた張りぼてが 現在は普通の一軒家みたいな  
もんさ

プログラミングされたばかりの モンゴロイド・ソルジャーの子供達

「うまくやりなさい」 大人達は言うけれど

決して頭を低くしたとしても 僕ら相容れることはない

お互い異質の存在 変えられやしない事実さ

神から許されるまでは 僕ら折れ合うことにしないかい？

そのかわり 僕が枯れたら

かつて水だった砂地に 帰してくれ

母と恋い慕った あの水に

新たな指導者と 彼らが作った文明

永き未来を 見届けよう

二度と開かれぬ瞳から零れる 過去からの祈りが届くように

礎となった砂の上に 想いの大輪が咲く

## ペアシート（前書き）

卒業シーズンだなあと、思って書き出したのですが、話がどんどんずれてしまいました。

## ペアシート

卒業までもなく 社会の荒波に飛び込んだ

花の局 つばね ペーパー・タワー

慣れないことは色々あるけど 君の声聞くだけで

心に霞んだ雲が吹き飛んで 夜を飛び越え 朝に仕える太陽を呼ぶよ

ひっそり囁かれる明日の秘密の仕組み

夢見ることは悪いことなの？

夢見る方法を問い掛ける大人よりは 素敵だとは思っただけ

幼い夢は成長して 今の私は君の席を磨くことを夢見る

疲れていても愚痴らない気を張るのもいいけど 時々子供みたい  
にしているほしい

早く大人になりたいと夢見てた あの頃みたいに

でも大人になって 少し垢抜けた君も 好きよ

あれだけ夢中になってた クローゼットはCLOSED・

コスメポーチの中だってSOLDOUTじゃなくて CLOSED・

それはね 君との素敵な時間のため

同じ楽しむなら 同じように共有したい

二度目の夏は 有休使って海に行こう

誰も知らない とっておきの場所

親友とだってまだ行ってない

これからも君の席を磨き続けよう

## 消えた春（前書き）

彼女がいる男性に片思いをしている話です。

意味合いは違いますが、前作と同じく「卒業」。

でも前作と違うところは、始まりではなく終わりであるといつと  
るでしょうか。

悲しい話は書きやすいのか、すらすら書けました。

## 消えた春

優しいのは私だけにじゃないのはわかってる  
指先に輝く真新しいリング どの誰かもわからない女ひとに 嫉妬し  
ているだけ

送り続ける視線 冷めても冷めても燃え続ける  
二人の間に隙間ない わかつちやいるけど  
貴女の知らない姿を 焼き付けるだけなら罰は当たらないでしょう

甘い顔をする彼は知らないけど 仕事のできる彼なら知ってるわ  
分け隔てなく優しく 誰も嫌う人なんていない  
あなたが性格なにかみの悪い人なら 嫌いになれたのかな

太陽と雪に包まれた窓辺 霜を破って貴方を見つけた  
私の雪を溶かす春は いつになればやってくるの  
滾たぎる心だけが次の季節を待てずに 春が冷たい世界を連れて来る

ふたつの傘 シルバーの光が差し込んで 強くあろうとする心に罅ひび  
をいれる

もどかしい 穏やかでいられない心室  
苦しみの熱から解放して熱を持ってはいけけないと言うなら 迷いな  
くかき消してよ

願っていた わかっていた  
私の春はこなかったんじゃないなく 消えたんだと

## L I F E I S B A N K (前書き)

元ネタは中学時代の先生に言われた言葉です。

多少弄っていますが、皆さんの想像力で色んな解釈をして頂けたら嬉しいです。

## L I F E   I S   B A N K

世界から爪弾かれて　コンクリートの街をさ迷い歩いた  
ふと足を運んだ先は銀行　これといった目的はなかったけど  
口が隠れるほどの白い髭に　白い髪　白い肌  
ステッキ持った老紳士が現われて　僕に笑いかける  
そして「L I F E   I S   B A N K .」と呟いた

これ以上失う物なんてない　今より上級の暗闇などない  
僕は初対面相手に　ぺらぺらと喋っていた  
無意識にすべて　あつたことを吐き出していた

欲望の虫が住んでいる間だけ　人間は金を造ることができる  
だが一日に与えられた　24の時間を作ることにはできない  
今という一秒は一瞬だ  
はした金と思う小銭でも束になれば　大金に姿を変える  
後悔することは来た道を振り返るということ  
前に進む為　それが遮る壁となることがある

君だけの物語は　泣いても笑っても一度きり  
気が遠くなるほどの道のり　今はつらいことばかりでも  
私のように年老いたら　いつか　アルバムの一部として懐かしむこ  
とができるだろう

決して放り出してはいけないよ  
君という命は　何世紀待とうと二度とは芽吹かないのだから

あれきり彼の姿は見ないけれどしっかりと　焼き付いている  
少し疲れた時に　呟いてみようか

L  
I  
F  
E  
  
I  
S  
  
B  
A  
N  
K  
  
L

## 源の大地から（前書き）

5年ほど前に書いた物です。

この時から皮肉った表現が定着するようになったのが、一目瞭然です  
ね。

現在と過去の作品を比べて見るのも、面白いかもしれません。

## 源の大地から

思い出してみてもよ　どこからきたのか  
数えきれない難題が　たくさん待ちかまえている

僕は独りだ　誰とも寄り添わずにいきていけるなんて強がってるや  
っはどいつだ？

でかいツラして吠える前に考える

側にはいつも　控えてた人がいただろう

そこまですなれたのは何故かって　考えたことはないか？

結局は彼女の手の内で踊らされていることにも気付けない

思い返してごらん　なぜに泳げないのかを  
生まれる前は　水の中で舞っていたのにな

魚たちは思うまま　ぼくらはどうして

水の中じゃ　生きられないんだろう

降参する前に　考えなけりやね

ぼくら　元を辿ればひとつだった

それが別れて　種がいろいろできたってわけだ

空を舞い　水を蹴り、地を行く

できることなら　枯れることのない命になりたくて

できなかつたから　すぎるしかできない

僕にその手を差し延べてよ

何もできない　こんな存在でも包んでくれるだけで

ああ、あなたには勝てないんだろうね  
あなたの力によって 僕はこの地に降り立った  
そして自分が愚かであることなど 認めたくはないが分かっている  
覚えておいて 私は影の花  
源の大地からのメッセージ

あとひとつ 肩の鉛を降ろしてあげて

## 虹の種（前書き）

人種のお話です。

今回はかるーく触れただけですが、一度ちゃんと書いてみたいものです。

タイトル日本語はやっぱりつけにくい…。

## 虹の種

今日の天気知らせるディスプレイ横切つて 虹が見える陸橋に飛び出そう

名前も知らない人とバンジージャンプ  
七色追うのも 刺激的でいいじゃない？

虹の橋を渡れば 下には蟻の人

前には僕の手を引く狼 入口破れば獣達が出迎える  
空飛ぶ鳥に地を這う獣

種の違う命が同じ酸素を吸っている  
僕の知らない世界 身近なところで広がっていた

ひとつだけしか知らない それに知る種もひとつだけ  
色だけで種をみつつに分けて 法の鎖で縛られてる

時代が始まった日から 今の今まで続いている

くだらない？ つまらない？ 意味がある？

僕らはどう映るのだろう

言葉と進んだ知恵 それを武器に動物を従わせてきたけど  
過去の新兵器はいずれ遺物として埋もれるよ

ここから何処へ行くのか 明るい想像の中に闇が紛れる

ここにいて夢を見ていたいけど 今の世界には捨てられないものが  
たくさんある

土の世界に足を踏み入れるまで 僕らの世界を創り上げよう

新たな時代を作る礎を築くのに 何年かかるのかはわからない  
果てが見えなくとも 虹の種を蒔き続けよう

j o k e r - s n a k e (前書き)

キューピッドといえば可愛いものを連想しますが、今回は蛇です。

「青い蛇？」と不思議かもしれませんが、細かいことは省略して)

笑) お楽しみ下さい。

j o k e r - s n a k e

どこからともなく やってくる

猫のように気まぐれな 青い背中の中のやつはj o k e r - s n a k e  
僕の過去を暴いた 用心深い彼女の使者

何度と交わした冷たい視線 彼女を見る目はひどく優しく映る  
あなたにだけ許された領域

何にも囚われず 何も持たず生きてきた

唯一執着するは 主人の幸せ

腕に絡み付いて 冷めた炎を宿して僕を見上げる

昔の話を根掘り葉掘り

まだしつこく 疑っているのかい？

言うより見せた方が早いようだ

僕の頭の中を見てごらん

君の大好きな ご主人しか映ってないだろう？

それでもまだ疑うなら 僕の夢をのぞきにおいで

久し振りに朝まで一緒 まさかふたりきりなわけない

いつでもどこでも 僕を監視するj o k e r - s n a k e

目を瞑っついても感じる視線

どうすれば君の信用を掴み取れる

何言いたいかは分かってる

僕が同じ過ち 繰り返さないかってことだろうか？

あと数年 その目でしかと見届けて

僕はまだ 彼女の隣にいる予定を立てているけど

優しい瞳に見守られる日を 心待ちにしているよう

僕を見る目 君の見る目

きつとびんていびん

## perplexity (前書き)

自分にカツを入れよう！と思って書きました。

やりたいことがない、やりたいことはあるけどうまくいかない。  
毎日同じ時間を過ごす中で、夢見ていたことさえ忘れてしまう。  
自分に向けての言葉でもありますが、いくつになっても少年のよう  
に夢を追い続けることを忘れないで欲しいなあと思っています。

perplexity

時の煽おだてに甘んじるのは 今日でお終い  
水の都で生まれ 島本の山を登りはじめた  
ビルの生えない 慣れない刺すような冷たい風  
まるで冷笑のよう

笑いたきや笑いなよ

呆れ顔の恋人そっちのけ 無我夢中描き続けた無垢な夢

何度も何度も打ち砕かれ だけど消えない胸の内

灯が消えるまで 足掻いてやれ

立ち止まっても 時は待つてはくれない

ありとあらゆる障害が道を塞ぐなら 手間隙かけて道を作ればいい  
地団駄踏むだけ 時をかけるよりはいいでしょう？

ラインに流される バラ売りされた時間たち

何やってんだらう 物悲しくなってくるね

生温いお湯に浸かっているスーツとの恋

破れたけど 今の僕を作ってくれたから後悔だけはしていないよ

困ったことがあれば すぐに理由をつけて

引き際が肝心だなんて思ってたない？

大人ぶって 子供みたい…だなんて笑ってないだらうね？

根付く少年の心 さよならできないうちは一緒に歩いていこう

夢を描いた空 いつでもどこでも描き足せる

v a i n l y (前書き)

大好きな雨をテーマに、今回は失恋のお話です。  
さくさく進んでくれるかと思ったら、執筆が止まったり。  
久し振りの？女性視点となっています。

v a i n l y

いつも私の記憶は雨からはじまる

プラスチックの箱庭から抜け出して

あなたと出会った日も 激しい雨が降っていた

はじまりと同じシチュエーション 終わりも同じなんて皮肉ね

想われることが幸せ過ぎて つきまとっていた影

三文芝居の最終予告 今だから明かせる

考えないフリして 知っていたの

悲しくて泣きたいのに 涙出てこない

悲しくてつらいのに 楽しかったときのことばかり考えてしまう

寂れた公園 痩せた花水木

見る度にあなただけを 思い出さなきゃいけないから

私すべて捨てていくわ

もったいなくて封を切らずにいた手紙 もう要らないわね

ヘビーローテーション 熱望 もう熱くはならないリング

ふたりの名前刻んでるけど 要らないでしょ？

あなたには あなただけのただひとつの指輪があるんだから

行くならそう… 誰も私を知らない場所

逃げる道を選び 受け入れたけど

惨めになるような 言葉には耳を傾けたくないの新しい土地に辿り

着くまで走り続ける

その雨で私の過去 きれいに流して

いつも私の記憶は雨ではじまるから

## o b l i v i o n (前書き)

今の時期丁度桜がきれいなので、桜の話を書こうかなと思ったんですが、私が見つめる桜のイメージは悲しいのしかなくて、でもそれだけじゃ嫌だなあ…と黙っていたら、こんなお話になりました。

タイトルも本来なら桜とかそれに近いものをつけるべきなんですよが、一番大きな言葉をもつのは忘れると言う言葉なのでこのタイトルになりました。

余談ですが、今年の桜もうすこしで見れなくなっちゃうんでしょうか。

o b l i v i o n

冬のページが春へとバトンタッチ  
雪が溶けて桜が舞う

言いたくて 言いそびれて  
とうとう言えなかった想い

勝手にすすくと育ち 認められてもいないのに 蕾をつけた  
咲く可能性 君には不必要だった

必要だったのは 駆け出す勇氣と土に足つけた根さ  
大木が薙ぎ倒されたって 風が黄砂を連れてきたって動じない  
力強く 逞しく 凜としていて

声すら知らないのに 心奪われたんだ  
花はいつか散る この世にだって終わりがある  
もしかして知っていたの？  
それでも輝いていた

仲間が減る度 風を読む力は強くなる  
見窄らしくなっても 彼女の心は変わらず

「まだ同じ空の下で生きているからわからないけど、死ぬことが怖  
いんじゃない。」

散って消えて 存在を忘れられるのが恐ろしいの「  
最後の瞬間まで 色褪せはしなかった  
言いたくて 言いそびれて  
とうとう言えなかった

こんな小さなことに 後悔しているのに  
君は最後まで 満足そうな満開の笑み  
氷山に浮かぶ 一枚の花弁  
飲み込まれるまで ずっとこのまま…

## W e a r i n e s s (前書き)

またも社会人ネタです。社会人ネタが楽しいと思える日が来るとは、思ってもみませんでした。

ここ最近英語タイトルが続いていますが、特に意味はありません。  
次回は日本語タイトルに…。

## W e a r i n e s s

季節だけならコンプリート むしろ余ってる  
思い出はまだ… ほんの少しだけ

プライベート優先願っても 職権濫用 superior が認めない

「好き」 装飾メール 寂しがり

「じゃあね。」 簡素メール 強がりに変わった

機嫌悪いの知ってる 頭痛いくらい

せめてディナーだけでも せっかく空けてくれたのに

飲みたいだけの歓送迎会 ムリヤリ押し付けて

「帰さないから…」 あんたじゃなくて彼女だけに言われたい

ひたすら平謝り 浮気の言い訳じゃないのはわかってくれているよ  
ね？

君以外なんて… 頭がないよ

遠くは行けないけど 休み取ってゆっくりしよう

今度は絶対さ 二言はないよ

職権濫用 superior 出現 今度ばかりは食い下がってやる

有休の武器振り翳す<sup>かさ</sup>

少し後ろめたい けどたまには…

倦怠気味の彼女 サービス不足感じてるきつと

練りに練った計画 平日の朝から空と海をふたり占め

二人でゆっくりなんて いつぶりだろう？

機嫌窺ってる訳じゃないけど 横目に見つめる

幸福チーク 三割増

小悪魔を脱いだ クリーンフェイス

サンセットトリミングしたワンピース

自惚れてもいいかな 怒りが少しは和らいだって

素直になつてくれた歓喜メール  
やっぱりその顔が一番好きだな  
いつでも最初に向けて その笑顔を

## 地獄の炎のような紅い瞳（前書き）

タイトルは前々から考えてあったんですが、なかなか形にできませんでした。

でも好きな話となると、俄然筆が進む私…。  
偏りのないように精進しないとダメですね。

今回は小悪魔な女性がテーマになっています。

一方的な話というのは悲しいようで楽しく書けるので、私は好きです。

## 地獄の炎のような紅い瞳

ああ また悪い癖が顔を出す

腰まで伸びたブルネット地獄の炎のように美しい紅い瞳  
暗闇に映える白い四肢

Cからはじめる香水で 足跡をわざとらしく残す

男の骨と心奪って 次の標的を探しにゆく

騙された！ 気付いた時もう既に遅い

追いかけたって 腕の隙間をすり抜けて

今もきつと旅している

そうこの僕 第一の被害者

だけど時々 きまぐれに僕のそばへきて

煙草の煙と一緒に 愚痴を吐き出す

「縛られることが嫌いな

私は欲望が大きくなった時動く それがいつだって一番いいのよ」

君は満たされるけど 僕らはどうなる？

問い掛けにいつも笑って消えていく

消えるならこの思いも消してってよ ねえ…

狙った獲物は一度で射る

手に入れたら飽きちゃって 新しいものを求める

じゃあなぜ僕のところに来るの？

期待していいの…？

だめならもう… 匂い残していかないで

激しい雨の中 突然の来訪

用事もないのに何の用？ 適当にあしらわれてるの 承知の上よ

他の男達同様 君を邪険にできない

むしろ… 愛に狂いそうだ

君の愛を僕に向けてくれるなら 狂ってもいい

その地獄の炎のような  
紅い瞳に

t h e a t e r   s t r e e t (前書き)

人が一生の中で経験することになる人生と、映画が放映される映画館（作中は劇場）って似ている部分があるんじゃないかなと思って書きました。

そんなわけでタイトルの意味は劇場通りです。  
r o a d   t o ~ というタイトルも浮かびましたが、少し違うように思ったのでこちらにしました。

t h e a t e r   s t r e e t

青白い諦め顔　また泣いてるの？

君は真面目で少しお堅くて　まっすぐな人だからね

一度や二度の落選　僕にだってよくある

まだまだしつこく　諦めちゃいないよ

誰もが人生の主役になる脚本を　胸の中に持っている

君はまだ今が出番じゃない　ただそれだけ

舞台裏でゆつくり　声かけられるの待っていていよう

人生はゲームだと　名を持たない少年が叫んでいた

間違っちゃいけない　だけどリセットボタンは有効期限過ぎている

やり直さない　ただ一度きりのゲームさ

何事もうまくいってちやつまらない

そんなことされちゃ　欲しいものも欲しく無くなってしまっ

まだなのかい　まだなのかい

急かさないで　みんな用意して並んでる

シナリオの順番待ちさ

おどおどしないで　胸張って堂々としていなよ

さあそろそろ君の番　唯ひとつの脚本が君の手に

中身を確認する暇も　練習する時間もないよ

本番は一度だけ　それもとても長い

あらゆる苦しみを取り込んできた君だから　きつとうまく演じれる

誰もが人生の主役になる脚本を　胸の中に持っている

さあ　今すぐ開いてみせて

光り輝くページが　またひとつ　ふたつ

永遠に増えていくよ

Contract (前書き)

いまだかつてないダーク路線に仕上がってしまいました…。

「無料より怖い物はない」がコンセプトです。

いやまさにその通り！

## c o n t r a c t

愛し愛され これ以上何を欲する？

胡坐をかいている奴 正直好きじゃない

だが仕事となれば 話は別だ

契約に相応しい血と代償に 褒美を与えよう

まずはその血が聖なるものかどうか 調べさせてもらおうか

憎悪と悪心を買収込む為に 売り払ったのは慈愛と良心

おまけについでくるのは嫉妬

持て余した両手を埋めるのは いつも日替わりの娘達

いつも上から目線 選ばれる側なんて真つ平

説く義理なんてないが 褒められた行為じゃないな

贅沢は底を知らず 次から次へと湧いてくるからあなたの欲望は  
受け入れられない

欲望の数だけの捧げ物 用意できるほど人間は頑丈にできてない

それでもいいなら… さあ早く心を決めてくれ

一番大事にしているものなら何でも それが俺達の美食

三大欲求なんて下らない 嘲っていたあの時

出会ったのは睡眠を妨げるほどの至福 味わったらやめられない

自我を見失い もう衝動に身を任せたまま

食欲をそそる 欲深い黒塗りの魂

拒否の声 光を知らない聖歌隊の歌声と交じり

もう口にすることはない

いつだって契約は一方的 空気に呑まれた方が敗者

好きじゃない奴に愛を振る舞う 御遣いにでも見えるかい？

この曲がった黒い翼 絵本で見ておけばよかったのに

## **s u i c c o l o r (前書き)**

作中に度々出てくる s u i c c o l o r は水色をさしています。  
敢えて英語にはしませんでした。

## s u i c c o l o r

私の好きな s u i c c o l o r 何も知らないまま目を閉じた  
苦い恋の味噛み締めて 澱んでいたんだっけ

金魚が泳ぐ海は 灰色一色

肌の上に飾った 鮮やかな花々にはもう惹かれない

草くたひ臥れたセツトの Tシャツとジーンズ

黄色い声彩った広場

横目に映ったのは知らない男ひと

私が好きだった s u i c c o l o r を着て 笑顔ふりまく

懐かしくなつて一歩 ときめいてまた一歩

恋なんてしないから 大丈夫

言い聞かせたのに 仕組まれたような偶然が距離を縮めた

なれなれしいけど 温かい大きな手のひらが好き

初めてだった 男の人に抱きついたの

箆笥に眠った s u i c c o l o r 着てみようかな  
あなたとかぶるから 他のにした方がいいかな？

でも今度は赤まじり

重ならないなら着てみよう

包まれた手 恥ずかしいから拒んでも

気にも留めずにまた繋いで

私に笑顔をくれる

同じ轍は踏みたくない

今の上行く情熱 越える存在なんて

出会えるわけないよね

今 素直にならなきゃ

ねえ はじめて出会ったお祭りに行こうよ

今回は太陽が一緒  
恥ずかしいけど 同じsuiccolor着て

t h e c e r e m o n y o f e n t e r i n g t h e r i n g ( 前 書 )

初スポーツネタです。

和訳してもらつと何のスポーツか見えてきます。

t h e c e r e m o n y o f e n t e r i n g t h e r i n g

ただ一度の手合いの為に 身を削る

目の肥えた玄人に 言い訳は通じないから

無の心で修練 流れる血と汗が輝きを増して

割れるような歓声が 響く

櫓を上目遣いで見上げる

いつも皆が同じように 憧れている

力だけでは届かない

口先だけなら もっと遠い

長い長い道程より 長いのは気力の持続

どの世界も微笑みながら 優しい顔は 表の顔

古いしきたりに従い 過去に生きた人を真似てみる

慎ましく優美体現

広く大きな背中で 言葉を語る

威厳はそれなりに 実力は途上中だから

不満なら真っ直ぐ座布団投げ付けて

終了時間くるまでにあつと言わせる

すべての視線奪い 圧倒させる

力の入った器 優雅で華麗な腕で驚嘆誘う

満員御礼 見返り大いに期待して

立派なことは言えないけど 後悔と失望はさせない

大層だと思ってもいい 約束しよう

声を張り上げ 両の掌の音で魅せて

身体ひとつ 魂のつけて 沸かせて 魅せる

土の色が見えないくらい 肌色が密集している

時の前に立ち尽くすことしかできない（前書き）

生きているからこそ感じる、いつかくる死が今回のお話です。  
やはり身近な人が亡くならないと実感できないことですが、軽視さ  
れている風潮にあるように見えるので今回は取り上げさせて頂きま  
した。

## 時の前に立ち尽くすことしかできない

人がいなくなると 月日が経つのが短く感じる  
凜々しく美しいあの人

儚むように 呟いた

熱くなった瞼 すっかり冷えきって

瞬きする間に 9年も過ぎていたよ

振袖通した 記念写真もあなたは知らない

あどけない顔など 今は思い出せない

大人に慣れていた 私も仲間入りしまつて

時間に限りがあること 改めて実感したよ

幼い慟哭は オアシスの味

あの日のことは夢幻

ついちらついた 嫌な想像

まさか：嘘だ 言い聞かせたけど

時間は待ってくれやしなかった

時の前に立ち尽くすことしかできない

自宅に来訪 外敵はスリッパで追い払う

火の粉の中を駆け抜けた 逞しく美しく

誰もが彼女は強い そう決め付けた

五黄の寅に生まれた性 そんなの下手な嘘

ただ強がり 弱いところ見せなくなっただけ

甘えたい でも言えない

あなたから生まれたわけじゃないのにね

気が強いところは 似てきたみたい

時間を永遠で繋ぎ止める偽りで誤魔化しても

別れがくる 時間は遠くはない

大好きな人とだって ずっとはいられない

寂しくて冷たいけれど 前に進まなきゃいけないんだね  
時の前に立ち尽くすことしかできない  
なら旅立つ日まで ランナーのように走り続けよう  
涙なら 風が優しく乾かしてくれる

## u n e a s i n e s s (前書き)

男性視点と女性視点から見た、両思いの恋のお話です。

大好きだからこそ不安になると言ってしまうのですが、強くも弱くもなれるのが不思議な恋愛の力ですね。

## u n e a s i n e s s

誰より近い場所で 誰よりも長く見ているのに  
不安になるから 最上級の言葉は口にしないで

幸せをかみしめて しがみついた腕の中  
離れた途端に 熱を奪われて  
そう感じているのは私だけ？

ただ不安で仕方ない 贅沢過ぎる悩みかな  
流行に敏感な人だから いつも纏った最旬コーディネート  
常に渋滞 子猫が作った長蛇の列  
仕方ないなって笑って ずっと待っててくれた  
きつと料理が上手な子がいい

私がいつもあげるの ビター過ぎるでしょ？  
文句言いながらも食べてくれるの 優しい人  
自信なんてない 余裕なんてゼロ

こんな私のひきつった笑顔 ほぐしてくれたあなたに  
酬いたい 椅子に体預けるように  
頼って欲しい 強くなるから必ずね  
弱い私を飲み込んでみせる

いつまでも 恋に慣れないみたい  
愛しくて言葉にしようと思うけど 照れくさくてなかなか言えない  
んだ

女の子の買い物 長いのは遺伝子で決められてる  
待つの 嫌いじゃないから  
でも君の笑顔は それより好きだよ  
会う度くれるから 毎日を頑張れる  
気付いてないだろう 愛ならたくさん感じてるよ

それでも不安なら 何度でも抱き締めてあげる  
不安になるなら 最上級の態度で  
気に召さないなら どうか教えて

## miniature garden (前書き)

現代の風刺モノです。

豊かで便利になった反面、失ったものが大きく、自分を含め再認識するべきだと思って書きました。

## miniature garden

慈愛が牙を剥き 傷つけることに躊躇いなくしている

平和に退屈を覚え 些細なことから争い合う

欲望をむきだしにした世界

忙しなくて 気を抜けば生きにくい

母体の大地を作らせた

神々が いらっしやるというならば

飽きをダストボックス経由で廃棄する

こんな心を作った 人間達の未来

あなた方は 遠い昔から分かっていたのでしょうか

皆生きるために 仮面をつけて強がっている

そうでもしなければ バランス崩して壊れてしまいそうだから

森を消し 作られた箱庭

またどこかで 緑が姿を消している

弱い数字が束になり 力を誇示する

レプリカの愛を売り 腹を満たす

無計画進行 後悔の一文字もなく

怠惰に流され 生きることがどれほどの価値なのか

十年後 自身の身と心で思い知るだろう

殺伐の鎖で縛られる中 終わりが来るまで生き続けることが償いなのですか

何が変わるわけではないけれど

この左手と 声が有る限り

歌い続けよう 子供がいなくなる日がくるまで

この箱庭の中で

**a mother rabbit (前書き)**

母の日が近いので、母のことを書きました。

いて当たり前前の存在でも、誕生日や記念日が近付くとその存在の大きさに気付かされるのです。

a mother rabbit

「あなたは気が強いから…」 人のこと言えないでしょう？

娘時代見てるようなのね 私見る目はまさにそれ

気が強いくせに 一人がキライ

誰か側にいて欲しくて

好きでもないのに 誰かといたり

燃えている時は盲目 冷めたら心眼

今はそうはならないわ だってこれでも子供じゃないんだもの

私が年取って 杖頼りにしてても

私はあなたにとって 子供なのよね

生きている間が続く限りは いさせてね

いくつになっても あなたの子供

「いい恋しなさいね」 前の男引きずってるんじゃないから

私が独り スーパーの安売りセールになるの心配なんでしょう？

必死になってまで 一緒になりたいくはない

私を邪魔する 半端なヤツなら願い下げだよ

心配ならしないで これ以上の苦勞はかけないから

情熱が冷めたらね 考えてもいいよ

でもこの先 10年くらいは無理だと思っから

思っっても 言わないでいてね

毎年贈るカーネーション

あと何回 何本贈れるかな

私の元を離れる時は 一緒に持つてっね

いくつになっても 私だけの母

gap(s) (前書き)

厳しい顔と優しい顔：今回のお話はギャップです。

タイトルにもなっていますが、複数形なのは一つではないからです。

優しいだけの笑顔じゃない 君のときたら…

厳しくて ダメ出しばかりの微笑

名画を見習って たまには癒してよ

強気に出れない僕 またお叱りを受ける

「生まれ落ちたドリーマー 前を見る！」

見ちゃいるんだよ 理想が欲しいんだよ

何かに縋ったって 迷惑はかけてない

酒に煙草 やめると公言しても

なかなか誘惑に勝てない 僕だけど

「いまずぐ叶える必要はないでしょう？」

諦めないなら いつか必ず叶えればいい」

その優しさが くせになる

甲斐性ないなら 将来もないなんて

影が大きな口を叩く

言い返すことは できないんだ

すべて 真実で事実なんだから

開き直る わけじゃない

目と耳が感じたことだけが全て

影を避け 炭酸水を飲みながら

酔っ払いのように 絡んでくる

こんな時しか出ないけど 本音丸出しの君

まるで鏡のようだよ

今日はずっと 聞いていてあげるから

「どうして女の子は 誰がくっついた

離れたなんて 噂好きなの

そして何も知らないのに 否定するの

理解なんて 誰もしてくれなくていい  
怠けなければ いつか報われる日がくるでしょう遠くないことだっ  
て 貴方といっしょに信じるから」  
その優しさがあるから 僕はこうしていつまでだって 追い続けら  
れる  
厳しさと優しさ くせになるよ

## violate (前書き)

今回はプライバシーの話です。

今はネットというものがあるから、何でも早く伝わってしまいがち。正しいことも誤ったことも。

## v i o l a t e

何故住所を知っているの プライバシーなんてあったもんじゃないね  
私の友人を 探ったなら それなりの覚悟をしておいてね  
タダじゃ 帰してあげないわ

そもそも 土産持たずに帰る気なんてないでしょう

ないことから あることを作り出す

幻想100% フィクション作家

それにかかる情熱だけ 評価に値するけど  
仕事だと胸を張り プライド武器にして戦ってる

テレビの向こう側で 噂が主食の誰かさんが  
待っているのかもしれないけど

既に領域を 侵していることに気付いてよ  
涼しい顔していても 私も只の人間

ストレスを脱げば 皆同じ

だから嘘で書かないで

私たちを傷つける それが仕事だというの？

そういつつもりなら 私にも考えがあるわ  
きつとみんな 思っているはず

放っておいて 誰と何しようが私の自由

電波乗って 名前売れたら

特別な存在になっちゃおうの？

プライバシー侵されても クールでいなきゃいけないの？

…それは違うでしょう

仏の顔も三度まで ずっと黙ってるけど

今の状態続くなら 牙を受ける覚悟だけしていてね  
とびきりの毒の牙 用意して待ってる

## 農場小劇場（前書き）

田舎に住む男性と都会に住む女性が夫婦になるお話です。

今住んでる場所が、都会から離れた所なので生まれたのかもかもしれません。

## 農場小劇場

エイプリルフルならずぎたよ 遅い冗談？

すべて捨てて 田舎についてくるなんて

君の口から 出てくるとは思わなかったんだよ

故郷は 何も無いところ

来て欲しくないわけじゃない

便利じゃないし 寧ろ不便だし

君の好きなお店 近くにないよ

あるのはクリアな空気

あとは壁みたいな 自然が待ってるくらい

それでもよければ 今すぐにおいで

不自由は させるかもしれないけれど

「そんなこと どうだっていいの

あなたの育った町を 見て暮らしたいだけ」

強気すぎる君が 車に揺られて

無意識に 凭もたれてくる

君はもう 他人じゃなくなるんだね

広がる 土の匂い

ついこの間まで 都会暮らしだった君

もうすっかり カントリーの人

我が子のように 花を愛し育て

日焼けした肌 気にしないで

畑の上に 寝転がる

板についてきたね みんな好きだって言ってる

都会が恋しくない？

若気に後悔してないか それだけがいつも気になるんだ

「そんなこと どうだっていいの

欲しいのは 甘い言葉でも褒美でもないの  
あなたが元気な姿で 帰ってきてくれたら  
それだけで 満たされる」  
この胸が 引き裂かれる思いだよ  
だけど 待っていて

君との暮らし それだけは誰にも譲るつもりはないから

## vice party(前書き)

またもやダークサイドです。

前回更新したものと対照的な作品になっていますので、違いをお楽しみ頂ければ嬉しいです。

## vice party

パーティーとは名ばかり 天使の皮を脱ぎ捨てた悪魔たち  
いつもは頭を下げている 法を掻い潜り  
悪徳が奏でる 賛美歌を高らかに歌おう

女は香を 男は力を武器にする

力こそが 唯一の存在証明

弱者が食われる わかっているから

どうなったとしても 四の五の文句は言えない

周知の上 這い上がろうとするのは

高みの見物に たまらなく優越感を感じるから

魂のクオリティ あげるためなら

手段は選ばない それが俺たちの常識だ

主が決めたわけじゃない 忠誠を誓うのは自分自身に

媚び売る対象は 生まれてから一人としない

生き抜く野性 野蠻で過激な欲望

誓いを立てるなら そのふたつのために

悪徳こそが 甘美なる美德

レールの上の正義なんて 理由がなければ生まれないだろう？

混沌の悪魔に 誘われるまま

生死を天秤に掛けて スリルに身を寄せる

仮面を闇の言葉で 繕いながら

標的なら決めてある 黒を知らない白い人達

深い闇を知った 瞬間の表情

光が吞まれる刹那 皮を被っていても素顔がよく似ているよ

引き摺り出してあげる 本当の君を

## 蘭の恋（前書き）

恋愛に傷つくことを恐れ、遊びの恋しかできなくなった男性と、そんな彼が好きな女性のお話です。

## 蘭の恋

知ってるから 嘘は吐かないで  
梯子してるんでしょ？

誤魔化してもわかる 気付いてないの？  
目が笑ってないの

ありきたりデート そろそろ収集できたかしら

夜景を見ながら エサを前にディナー

自然な流れを作って 愛を囁いて

出口潰して 喫茶店

何回も同じ場所 飽きるしつまらないでしょう？

だから私はね 「どっちでもいい」なんて

曖昧な答え 作っていないの

誰かと同じじゃ 意味がない

一番になりたいわけじゃない

けど友達じゃ辛いから 気の迷いでも

一時だけ 想い通じた恋人でいさせて

私達に夢を見させて あなたはどこで夢を見るの？

暗い映画館 横顔に一粒の滴

線となって 流れゆく

危険な恋ばかり してきたあなたには

痛く感じる 純情ランナー

きれいなのもいいけど 笑顔が見たい

あなたを変えた 女に興味はない

眼中にない それは嘘だけ

本当の笑顔 引き出すのはいつになるかな

そして誰が 引き出すのかしら

言わないけど それが私ならいいな

傷ついて ぶつかって

心が血を流すのが 恐ろしいんでしょう？

だから遊びだけの恋に 夢中になってしまっのね

## 白い地図（前書き）

今回のテーマは人生の中における冒険と旅です。

色んな要素を入れようとしたら、中途半端になってしまいそうだったので、途中で切らせて頂きました。

## 白い地図

実際に歩かなければ 表示されることがない地図  
生まれてから死ぬまで 描き続ける

不変許さない 極寒の地の女神に惑わされ  
危険に身を投じる 悪魔生まれの天使に唆され  
砂漠に吞まれそうな所を 救ってくれたのは  
人となつた夢魔だつた

長い道を歩いてきた 色々な人間を見てきたけど  
それさえ 世界の一部にすぎない

敵味方問わず 全て飲み込む荒波の前には  
僕らは笹の船も同然だ

それでも果敢に飛び込むだろう

動く前に あれこれ考えるのは損だから  
その時になって 初めて考えればいい  
動かなきゃ 足踏みと同じ

後の祭り 楽しむ祭りは前の方がいい

いつも誰かを動かす 絶えることなく生まれる波  
当てもなく どこに向かつているんだろう

光を胸に 永遠を旅する僕らと同じ

地図を描くためだけに 旅をしているんだ

幸福はいつも 延滞してしまうから

不幸と出会わなきゃ 釣り合い取れない  
循環の媒体 それも彼らの役目なのかも

現代に贈られた イブとキューピッドとの出会いがすべてを変えたよ  
まだ地図は埋まっていない

一人になって 迷いを隠せなくても

旅立つ順番やってきても 不思議と燃えない

地面が存在する限り 永遠に描き続ける

## 夢の足掛かり（前書き）

好きなものに動かされて活動の方にまで影響が出てしまう、そんなことを書きました。

## 夢の足掛かり

歩くのが仕事じゃないけど 鞭打って歩いてる

手と足と声 繋がってるんだね

派手なビート 変わらない好み

過去をオアシスにする ニトロのフレーズ

水に浸かった心に 点火する

誰かに習ったわけじゃないけど 頭の中に住み着いた住人たち

おとなしくなるのは 僕が冷めた時

でもそうなることはない 一人にはさせてくれないから

傷を撫でてはくれないけど いつでも教えてくれる

思うなら 動かなきゃ

何にも始まらないって

だってそうでしょ？ 後悔してる人みんな 走る勇気を失った人たち

現実の色に汚されて 染まってしまいそうになるんでしょう

染まり切って 消えるアイデンティティ

好きなものだけ 揺るぎない

世界を創る 褪せないメロディー

どうして？ 考えるなら足を出して

恐怖にしがみつかれたら もう退くしかないよ

そうでないなら 醜く粘ってよ

這いつくばっても 手だけ離さなければいい

あと5回くらいは いけそうだよ

いつだって 僕を誘いだし

動かすのは 夢の足掛かり

## 贈られた電報（前書き）

今回のテーマはニュースです。  
犯罪や命を部分的に取り入れました。

## 贈られた電報

羽音と悪い夢で目が覚める

羊が奏でる子守歌 空しくも破れて

不安を映した空の色 まるで心のカーテン

悲しみに落とされた人を思い 止まらない涙

月よどうぞ吸い込んで 叶うなら弱くはないと信じられるから

泣き疲れて ようやく眠りを受け入れる

目が覚めたら また針の筵に包まれることはわかっているけど

稚拙を脱ぎ捨てた 未熟な色を手にした子供は偽りを美德と謳う

言い訳を生産することだけうまくなった 大人は背徳に麻痺した常

識を掲げる

呼吸している間に 白い命が生まれ

研がれた牙に 奪われる

争いを嫌う僕だって 日に三回食らっている

生命を維持するのは 自分自身と繰り返し言っているけど

贅という名の礎があつてこそ 一人で生きていけるほど強い種なん

てどこにもいない

亡くなつた命を食べて 今ここに立っている

暴走した細胞に伝えて 今生きているのは万物の賜物なのだ

今もどこかで 清らかな血が流れることを思う

断罪を告げる針の音 何かの為に生きると言う事の葉に似ていた

## Limit (前書き)

今回のテーマはすれ違い愛です。

お互い好きなんです、ライフスタイルの違いによって温度差が生じてしまう、というもの。

ちなみに私なら、理想を追いかけて走る男性側です(笑)

## Limit

赤信号なら迷わない なら渡れるだろう？

時の橋を渡るのがそんなに怖いの？

怖じ気付いて 逃げて行く絶好の機会

「でもね…だつて…」 そんな言い訳考える間に逃げていくんだ  
せめて言い訳するなら 僕を騙せるクオリティーで提供してくれ  
いつか後悔するよ あの時渡ればよかったと

そう思えたら まだ救えるけど

それでもまだ時のせいにするつもりなんだろう？

僕は君を待つてられない だからお先に行くよ

時間の次は 僕のせいにするんだね

裏切るつもりはなかったけど 交わした約束たちに伝えてよ  
すべて水に流すってさ

君を憎んで とつた行動じゃない

約束を守る権利すら 互いにもうないんだよ

僕が話した夢の未来に いた筈の君はいない

僕が幼すぎたの？ 君が大人になってしまったの？

もしそうなら 理解しているはず

好きだけじゃ 一緒にはいられない

嘘つき通して 生きていけるほど

人の器が大きくないから 悲しいけれど

ここらで別れようか

今度どこかで会う時がくるとしたら きっと人込みの中

元気でねと 小さく手を振ろう

a c t t h e l o v e (前書き)

恋人の関係という意味では決して純粹ではないのですが、真剣に相手と付き合うことに疲れた彼女にすればこれが純粹。少し捻くれた愛情表現。

a c t t h e l o v e

下心に蓋する気ないなら 本気でしないでね  
体と心を 消耗するのに疲れてしまったから  
気楽な関係がいい 浅からず深からず

生傷の抉り合いは 優しいものではないでしょう？

だから私の姿は 晒さないから

名前も過去も 知らないほうが一番いいの

知ってしまったら きつと深みにはまってしまう

好きな名前で呼んで 私の知らない女の名前でお願

嫉妬に狂って あれこれ妄想するのはしんどいから

そんなとこ きれいな情景ではないでしょう？

何も言わず 無防備な寝顔見せるあなたが愛しくて

もう嘘はつかないから 上級のお約束

ほしいだなんて 一度も言っていないわ

だから気にしてすらいらないの 気に病まないで

天邪鬼だって 思ってるでしょう

重い約束ほど 当てにならないものはないんだから

皆そつよ 守れもしないくせに

大きな約束をする

私を縛り 縛られたいというなら

私たちの恋愛劇も お終いな

こんなふうに分れるの 考えていなかったわけじゃないけれど  
思えば寂しいものね 前の生活に戻るの

## 紫陽花の森（前書き）

梅雨時に咲いていた紫陽花がとてもきれいだっただので、紫陽花がテーマになっていきます。

薔薇ではありませんが、美しいものには刺があるというメッセージも含んでいます。

## 紫陽花の森

紫陽花の森 時を忘れひとりでに咲いている  
緑を薄紫に染め変えて 季節の渡り鳥を誘う  
霧と滴を操り 名乗り出る支配の座  
奇を好む心 刈れるだけ刈り取って  
光を強く抱き 闇を優しく匿う  
螺旋のように 繰り返される生と死  
羽の欠片さえ ここでは原動力となる  
静かなる森 その美しさとは真逆の厳しさで  
力なき者を弔い 静寂を守る

好奇心で足を踏み入れる  
恐怖で警告しても 後を絶たない  
その身に刻みこまなければ わからないならば  
冷たい現実で その背中を凍えるほどに冷やしてやるごと  
騒ぎ出す紫陽花の森 手足とならん生き物たち  
深い霧は感覚を鈍らせ 気力を殺ぐ  
蜘蛛の巣で絡めとり 迫りくる牙と嘴  
悲鳴と血の気が引いた形相 趣味ではないけれど  
自然の世界では 摂理こそが法律  
そして上も下も 一切無関係  
拳げるとするなら この紫陽花の森が主  
緑の世界を乱す者には 消えない恐怖を  
緑の世界を守る者には 久遠の安息を与える  
色褪せぬ鮮やかな花弁 時を経ても変わらぬ姿で  
召されるその時を静かに待っている

## 雪降る街（前書き）

まだ夏なのにクリスマスのお話です。  
クリスマスといえば、豪華な食事にプレゼント……というイメージがあるのですが、特別な物が何もない特別な日というのもいいかなあという思いがあり、出来上がりました。

## 雪降る街

雪降る街に 君の好きな歌が駆け巡る

バラードなんて聞きもしないのに 君が喜ぶなら…なんて  
柄にもなく 必死になつたりした

君の笑顔こそが 最高のクリスマスプレゼント

欲しい物なんて何も無いよ 大人ぶってみただけ

君には見破られていたみたい

あれ欲しい これ欲しい

無茶なリクエスト 恥ずかしくて言えなかったんだ

何も予定入れないまま 時間だけが過ぎる

いつものように帰宅して 待っていたのは彼女と豪勢なディナー

お帰りの笑顔 白い肌を飾る赤いワンピース

たまには家もいいよねと言う彼女に 僕は頭が上がないんだ

贅沢もしない 我儘だつて言わない

いつか爆発して とんでもないことになるんじゃないかって思ってる

でも点火してる素振りさえ 見せないから不思議なんだ

夜明けが近くなって 眠そうにしている君

まだ寝ないと意地を張ってても 今にも眠ってしまいそう

いつもありがとう そういつて眠りにつく

こちらこそ 言つたつて聞こえてないから

言つたうちには 入らないけど

目が覚めたら開けて 小さな赤い箱

眠つた君とのキスで 今夜は眠ろうか

## 仁紅色女獅（前書き）

ずばりテーマは肉食女子と草食男子です（笑）。

どうも最近男性に元気がないというか、活気がないというか…そんな印象を受けます。

逆に女性はとてもエネルギーシユ！

この違いは一体何でしょう？

時代の変化とともに女性の立場が変わってしまったただけなのか、男性が弱くなってしまったのか…。

男性バージョンもいつか書いてみたいですね！

因みに私は男性が嫌いというわけではありませんので、誤解しないでください（苦笑）。

## 仁紅色女獅

跪き 支え 従った

やがて淑やかな淑女は 肉を好むようになる

時代の変化とともに 優しいだけでは止まらない

聖母も天使も 強さを兼ね備えた

アマゾネスのように 逞しく

シスターのように 慈愛を忘れず

強さを妬む 余計な情報垂れ流す

ブラウン管の人達に 左右されないで

踏まれても空を目指す花のように

強く生きる姿は それだけで美しい

生命力を奪い取った 嫌疑をかけられた或る日

陽光引き連れて 裁きにやってきた

自分の脆弱さ 棚に上げるから言ってあげたわ

あなたの所有物だったとしても 私の中に入ってしまったから

もう返却はできないから どうか諦めてと

そしたら逆上して 怒りを露にした

ひとつの使命しか 与えられていない

遂行したら抜け殻になる あなたたちとは違うのよ

特別だと 思っているわけじゃないけれど

私たちは 与えられた仕事途切れる事がない

だから貪欲になる

背中を見て倣うより 強き遺志を置いていった者に目を向けよう

勝利の旗は 私たちの手の中に

## CLIP (前書き)

恋人たちの日常を切り抜きました。  
甘い時が幸せなんですよね、きっと。  
そして苦しい。

## C L I P

念入り確認 左上のボタン押そうとした時  
私に届いた 君からのメール  
用事あるわけじゃないんだけど 君のこと考えてから眠りたくて  
気にしないで そんなのお互い様  
作ったメール クリア長押しで白紙にして  
友達が教えてくれた ケーキ屋をダシにした  
今度行こうねって 軽い口約束  
遠回しなことするなって 怒られそうだけど  
いつもデートの日 さりげなく私の欲しい物を持ってきてくれる  
いつになっても 憎い人ね

今日は君のメール まだ届かない  
寂しくて文字を打つ 送信の一步手前  
リビングに鳴り響くインターホン  
突然の来訪なんて 狡いじゃない  
髪についた雫 顔を伝ってコンクリートを潤す  
天の手伝いあって 色気増しの君  
そのままの仁王立ち 肺炎にでもなられちゃ困るし  
どうぞ入って 大した物はないけど  
だって突然なんだもの  
ミルクティーと花林糖で許してね 余り物で失礼  
用件聞いたら 無言のまま  
五分してから ほんの少しだけ  
顔見たかっただけなんだ  
照れくさそうに 視線ずらした  
そんなことされたら こっちまで照れるじゃない  
いつになっても 可愛い人ね

## ビスクドール（前書き）

最近着たい服装のテイストが変わってしまったので、風変わりな作品が出来ました。

## ビスクドール

揺籠で眠る　ビスクドールのような赤ん坊  
ビスチエヤコルセットを身に着け　ドレスの似合う女性になった  
彼女は蝶のように美しくなった　けれど私は執事の命を授かった頃  
から変わらぬ姿

誕生を祝う数が増える度　首を締めるように胸が締め付けられる  
人の形をした機械　元より体温はないのに  
心だけが　なぜ植え付けられているのだろう  
顔を合わせる度に見せる笑顔　きっと誰にでも見せている  
洗脳するように　思い込ませた  
冷たい腕では　幸せを作ることなどできはしない

女主人が持つてきた　良き縁談

身分も人柄も　申し分ない

彼女の幸せこそが　自分にとっての幸せ

そう信じてきたのに　渦巻く黒い感情

もう既に執事としては欠けている

いつからだろう　中途半端な人間になってしまった

この世で一番美しい姿で　彼に手を取られやってきた彼女

清廉と深愛を誓う儀式　心にもない祝詞を贈った

闇夜だけは優しくしてくれるだろうと　窓辺でひっそりと袖を濡ら  
した

月日が経てど　屋敷から離れられない

彼女はもう　他の国に嫁いでしまったというのに

**a m b r o s i a (前書き)**

神様とその子供の話です。

頂点に立つ人と言えど、完璧な人はいないと言うメッセージを込めて作りました。

話が話なのであれこれ想像して貰えると嬉しいです。

a m b r o s s i a

天に住まう神々の戯れ そのひとつが人間の器の選定

男女を分けるアンブローシア 生み出された男と女が世界を作る

知れば知るほど深みにはまる 仕組まれた罫と知りながら

「思い通りにならないものなんて この世のどこにもあつてたまる  
ものか」

見失われた神の権威 目的を忘れ

寝ても覚めても 実験のことばかり

命を慈しむべきものが 悪魔に魅入られ身を墮とす

悪戯心から生まれた 子供に等しき者に恋におちる

煌めく星々が霞んで見える 金色の髪

血のように紅い 引きつけて止まぬ瞳

言葉なき彼女とすれちがい 漂うアンブローシアの香り

ほんの少しだけでいいから触れたい その次は抱き寄せたい

抑えられない欲望 抗つてもなくなる兆しはない

とつとつ壊れた理性の引金

白より白い腕 力任せに引き寄せる

知識は与えられても 言葉は与えていない

知らないはずの 言葉を紡いだ

「神聖なる我が神よ あなたも人でしかなかったのね」

遅咲きの自己防衛 脳裏疑う

神の園に 人と神しかいないはず

築き上げた 遺伝子の塔

軋みながら ゆっくりと崩れ去る

清き美しさを忌む 悪魔は冷笑を添えながら

**c a g g e a n d c o f f e e (前書き)**

女子はいつまでも現実的でドリーマー。

c a g e   a n d   c o f f e e

鳥の飛び方思い出したあの子　ばつの悪そうな顔して

「優し過ぎるだけじゃ　生きていけない」

君のため　君が喜ぶなら…と

よかれと思ってしてたこと　エゴでしかなかったのだろうか

僕らふたり　カフェオレにはなれない

このまま永遠に　ブラツクのまま

君専用オーダーメイド　盲目の恋のオートクチュール

上辺だけの洋服と　君が好きだって言ってた人の髪

そろそろ脱いでもいいかな？

ぎっしり詰まった　思い出の場所

もう天国に一番遠い　生き地獄でしかない

過去とお見合いして　生きていけるほど

僕の心は　広かないよ

住み慣れた街　これで最後とすべてを捨てる決意をした夜

繁華街を擦り抜ける　寄り添うふたつの影が見えた

風が通り抜けるから　胸が痛いんだ

恋の痛みの　せいじゃない

ミルクになつてくれる人　見つけたなら

もう悲しい表情　見なくても済むんだね

早く行こう　鳥籠の鍵は壊れた

縛り続けられた翼　今解放されて

光の見える道　歩いていけば

きつと道標が　待っていてくれる

## 夢という大志（前書き）

冷たい時代だからこそ、持ち続けることが難しい夢や希望。

一度表で描いたならば、どんな形であれ成す為に邁進することを忘れ  
ないで頂きたいです。

強い思いはいつか叶うと信じながら。

## 夢という大志

褒めちぎられるのも 気持ち悪いけど  
かといつて 貶されるのもなんだかね

子供の頃なら許された バニラビーンズの夢

小さければ見ても 笑顔で聞き流してくれるもの  
なぜ大人になったら 規制されてしまうの

そして易い道を選ばせる

リスクが低く プライド壊されることもないから

現実を守り抜くのが そんなに素晴らしいことなの？

僕にとって夢を持たないことは 運転手を失くした列車と同じよう  
なもの

苦痛に苛まれ 安泰を奪い去られても

そんなふうにはなりたくはない

まだ夢の中にいるの？ 早く出てきてよ

残念だけど ちゃんと現実世界に存在しているよ

夢に逃げているわけじゃなくて むしろ逆だと知って欲しい

茨の道の出口は いつだって消えなくて挫折するのを待ってる

抗い続けて 苦痛をこの身に吸い込む

平伏す振りして 機会を窺っている

無理なんて溜息吐く前に 動いてから決断して

灯がまだあるなら 根負けさせる気構えで

僕の列車は走り続ける

朝がきても 夜が空けても

夢という大志 消え失せるまで

## g e m i n i (前書き)

歪んだ愛情で黄色の月の光を青に変えてしまつゝ、という女性のお話です。

青白い光もきれいといえばきれいなのでしょうか。

g e m i n i

月が丸い理由　ひた隠しにしてきた許せなかった三年  
とうとうあなたは宗旨変え　星の娘を選んだ  
どうして同じ顔なのに　私じゃいけないの？

独りになった寂しさ　愛情が憎悪に変換させる

表面上クールフェイスを演じ　業火の悪魔を宿した

昼間は太陽が邪魔しているけど　夜になると寂しくて疼いて暴れ出す

世界の果てを映した　硝子玉の心

欲しいものを手にしても　満たされない

金箔の壁紙　消された国の果实

コレクションしてるわけじゃない　手に入れたら飽きてしまう

星の娘の所有物　そんな認識しかないから

海を映すあなたの瞳　欲しくて堪らないのかもしれない

星屑を繋いだ空が　二人のジルバを飾る

金色の光を注ぐ月　スポットライトのように色を変え

金から青に　姿を変える

月が丸い理由　あなたに対する想いの大きさなの

愛や恋じゃなくて　今は憎しみだけの塊

奪ったり壊す勇氣はないから　ささやかなお祝い

もう光の中では　美しく踊れない

見えなくなつて　失念していたのでしょうか

私は月の娘　星の娘とは血を分けた親族

受け取つてそして悔やんで　私の愛の深さを

ファーストフード極東支店（前書き）

自分のツイートから生まれました。  
物に対する軽視について書いています。

## ファーストフード極東支店

誰かと同じじゃなきゃ 不安で夜も眠れない

誰かと同じじゃなきゃ 誰かと一緒じゃなきゃ

魔法のように 何度も擦り込ませた

細胞ひとつひとつ 刻み込まれた

麻痺は最愛の人の キスでも解けない

使っては捨てる日々 ここらへんで終わりにしようよ

国の言葉も廃れてきて 新しき文明の目覚め

希望か絶望か カードが導く答はいつも黒色

君らはいつも こう言うね

「今がよけりゃ 先のことなんてどうでもいい」

放り投げるなら 一部じゃなくすべてを捨てていけ

口は一丁前でも 独りではきつと儂い存在

軽視を風刺する さて次にいこうか

初めて得た愛情の証 愛しき名前

数値と何ら変わらぬ 個体の名称

興味を削がれたら ダストボックス行き決定

悲しみを置換してみれば きつとできはしないのに

後悔する前に 少しだけ時間を自分の未来のために使って

そしたら素敵な未来 描けるはず

伝え広めればきつと 閉店は近い

経営者は心の影 ファーストフード極東支店

remove pain (前書き)

失恋したばかりの男性に思いを寄せる女性のお話です。

ハッピーエンドだけがすべてではないかな、と。恋愛と言っよりかは、この時点では友愛かもしれません。

r e m o v e   p a i n

横取り狙い過ぎった心室など 醜悪以外の何者でもないから  
恋心香ったと気付いたら どうか態度を変えないで

傷ついた心に付け入る 悪役にはなりきれない

悲哀の記憶 時間がきつと助けてくれる

彼女の代わりなんて きつと勤まるわけないから

空気のように側にいる 何も望んではいないから

それだけなら いいでしょう？

夜空の下で涙の流星群

誰にも言うなと 固い約束を交わした

怒るかもしれないけど あなたのことを可愛いと思ってしまったの

気が強くて素直じゃない どこか見下してるような態度のあなた

こんなに優しい 目をしていた？

予告もなく 突然海に連れ出された

心地いい潮風と 流れるエメラルドグリーンのフィルム

問い質す暇 一切支給されない

どうしてなんて 今は聞く必要ない

傷ついた心の 軟膏になれるなら

言葉にはしないけど 些細なことでも厭わない

「ありがとう」 珍しく口にするあなた

彼女に見せた笑顔は 無理して見せなくてもいいの

素面のあなたで 私を魅せて

**d i v i n e p u n i s h m e n t (前書き)**

また風刺モノです。

最近ニュースを見れば同じような事件ばかり。

それも目を瞑りたくなるようなものばかり。

そんなわけでタイトルは天罰です。

divine punishment

亀裂生じた氷の地面 音を立てて崩れながら沈んでいく  
操れないなら 蛇足にすぎないレート

大量生産されるなら 紙屑と変わらぬ価値を見出だされる

都合の悪い時代 神を罵倒した者が

助けてくれと 神仏に縋りつかんとする

そろそろ氷河期の訪れかな？

要らないものは 廃棄して存在を消去

必要なものは 如何なる手段でも手に入れる

血に塗れた歴史ならば その血で洗い流せばいい

歪みに歪んだ 自分のためだけの黒い常識

いつからこんなになつてしまった？

司令塔をなくした蜘蛛が蔓延<sup>はび</sup>る街 罰せられる時が来るまで気付かない

電波が届ける新情報 似通ったケースを集めているかのような

幸せを削ぎ取つてばかりのそれは 藍色に似ている

基盤を作りしあなたは 裁くことに関わらず

高みから 静かに見つめている

わかっているのなら なぜ導きの手を差し延べて下さらないのですか  
罪を自ら悟り 償うことが罰だというのなら

生きる為の陽光を 注いで欲しい

生きている ほんの少しの間だけ

M a r g u e r i t e (前書き)

どうしても花を使いたくて、今回はマーガレットにしました。  
狐が恋をしてしまうわけですが、命の長さが違うからと突き放して  
しまいます。

M a r g u e r i t e

風と戯れながら 光の水を浴びるあなた

遠くから見つめてるだけだった僕は 特別な感情を覚えた

手足の生えた動物なんて あなたから見れば物珍しい種でしょう？

あなたを想って 浅い眠りに苦しんだって

僕らはあまりにも かけ離れ過ぎている

真昼に座視 それだけじゃ物足りなくなつて

眠りから覚まさないように 静かに歩み寄つた

風にそよぐ花卉 闇に透ける白無垢の体

眠れる彼女に 悪しき毛皮のマントを寄せる

眠る振りして 悲しい視線を送られていることなど知らなかった

日課になつた来訪 あなたは一人だけ眠っていなかった

「はじめまして 可愛い狐さん」

重なり合つた視線 戸惑いながらも言葉を吐き出した

「会えたのは嬉しいけれど 私とあなたは結ばれることはないわ

この地に植えられた命 喻えるならそう蛩と何ら変わらないの」

見渡せば仲間はいなくて 暗闇の中に花は彼女だけ

もう永くはない 知つた途端に涙が頬を伝う

「お行きなさい 覚えていてね

私が確かに 生きていた事を

そして振り返らないで 強かに逞しく生きなさい」

風を切つて 地平線が見えなくなるまで走り続けた

さよならの代わりの涙 噴水の如くほこほこ迸る

## 罪色羊児（前書き）

長い間犯罪者を裁いてきて、ある日突然善悪を考える心が芽生えるという話です。

公平に裁く存在だつて人にすぎないから、心はあります。

残酷なように見えますが、裁かれるようになるのにはそれなりの行動と理由があるのです。

そんな中で最後に彼が躊躇という人間らしい優しさを見せます。

結果的に良い方向にいったのか、悪い方向にいったのかはわかりませんが…。

## 罪色羊児

愚かなる支配者よ　まだわからないのか  
火の国は水に擁され　水の国は業火に投げ捨てられた  
都合のいい崇拜主義と　逸楽と刹那の愛好の成れの果て  
透明な涙を流して見せても　同情に値しない  
許しを乞うのは　罪を認めた何よりの証拠  
堪忍してはやれないけど　もう認めれば？  
泣くことに疲れたようなら　涙の跡は優しく風で撫でてあげよう  
情状酌量で　罪の爪痕は燃してあげよう  
嫌だと泣き叫び　苦しみ嘆くならなぜ  
最初から犯さなければいいのに  
犯罪とはいつの時代も　こんなものか

裁くのに感情を持ち込んでいたら　この世界なんて成り立たない  
数多くを裁き　落として罪の色が見えなくなってきた  
善悪が存在する意義　意味は一体どこにある？  
正しい道に導く為なら　命を奪うことすら正当なのか  
罪を裁く立場でありながら　今子供のように迷っている  
裁いていいのか　裁いてはいけないのか  
あるはずのない心　軋んで剥がして檻に閉じ込めた  
二度と迷子にならないように  
これを最後の優しさとしてよう  
今一度考える猶予を与える  
改善の片鱗見られないようなら　この土地すべてを粉塵と化そう  
飽き足りないなら　空気を霧の刃に変えてみせよう

## 寅と卯（前書き）

大人になればなるほど、親も年を取るわけで。

感謝の言葉を言いにくくなっているの、感謝と皮肉をまとめにしてみました。

でも本当の言葉はありがとうなんです。

## 寅と卯

五十九回目のセレモニー 来年の今日には紅を贈るね  
優しさを強要されて 苛々が募った

素直になればいいのに 天の邪鬼になるから  
私もあなたに合わせていたら 求めるものを与えられることを要求  
する

今更ね変えるなんて できないのわかってる

なんとかの癖になんて言うけど 助けを求めているんでしょう？

毎日の感謝 積み重ねすぎて

愛しているとありがとう すっと胸から出てこない

ここまでしてくれてありがとう 疲れる時もあるけれど

明日もあなたの為に 歩いていく

一人で生きてきたなんて そんなこと思ったことないよ

ストレスを癖みに変えて ぶつけたりなんてしないで

時に遅しい父となり 時に優しき母となり

並々ならぬ苦勞が あったことでしょう

昔はよかった あの時は…なんて言葉は飲み込んでね

これからはきつと 素敵なことばかりが待っているから

生きにくい時代に ここまでしてくれてありがとう

すぐに返せそうにもないけど 私が私らしくいることが

あなたへの恩返しだと信じて 明日も走り抜くよ

## paralysis (前書き)

誰かに決められるんじゃなく、自分の頭で決めて自分の足で歩こう。  
頑固なまでの意思を持って欲しい、そんな話です。

## paralysis

覚えたての新しい言葉で 人を傷つけて何が楽しい？  
育ちすぎた体 停まった魂

着せ替え違えた協調性 周囲に物を合わせることに

私らしいって言われても 良さが見つけられないよ

用意された敷地の中が 狭いと嘆くなら

自前の歪な船用意して 漕ぎ出せばいい

青く美しい 清らかで残酷なまでの世界が待っている

好きと言う言葉も 流行廃りのシーズン過ぎたら

使い捨ての消耗品 悲し過ぎるよ

生み出す痛みと喜びを 知らないというのは

創造主たる母は 何を教えたのだろうか

美しき豹を演じるための 仮初の技能しか 与えられなかったのか

誰かといるのは 個として弱いことを認めたくないから

だから非道なことしたって 罵られても苦はない

感情を汲む心 母の胎内なかに置いてきたか

あつたとしても 麻痺して凍ってしまった

体が楽を選ぶのは 疲労を嫌うから

心が楽を選ぶのは 豊かでありたいから

学び舎を離れたら どうなるだろうね

指令を下す頭はない 善悪を判断する足もない

創造主たる父は 何を授けたのだろうか

弱肉強食を生き抜くための 仮初の強さしか 与えられなかったのか

## 持ち込みドラマ（前書き）

失恋で恋に疲れた女性の話です。

次の恋に走りたいのに、失恋の悲しみに恐怖して走れない。  
それでもやっぱり求めてしまうのです。

## 持ち込みドラマ

機械仕掛けのドラマティック 泡沫の喜劇はなしなら間に合っているから  
優しくて気の利く男ひと 味気ないより扱えない  
優しいだけはずまらない 荒いのは単品じゃすぐ飽きる  
何でもかんでも理由つけるけど 壊されるのが怖いだけ  
硝子でできた心の臓 紙や小石より弱い  
甘い関係に憧れるけど 終幕想像しては現実に引き戻されるから  
何も要らない 想うならそっとして  
水を忘れた心 針のような雨で潤して欲しい

毒草仕込みのドラマティック 永久の童話はなしならもう聞きたくない  
いつもハッピーエンド 実は純粹なる虚構物語  
歪でごめん 裏切られてゼロになる  
そんなことになるなら 独りでいた方がいい  
泣いて疲れて 傷跡作って  
凍みて沁みて 一人でいるより孤独を感じてしまっ  
だからそう 一人でいいの  
つぎはぎのプライド 大人ぶる強がり  
全部全部 私を守るためのもの  
何も要らないなんて 嘘もいいところ  
激しい恋に身を委ねる その勇気がほんの少しだけあったら  
私の硝子も 角が丸くなるのに

## f e a r (前書き)

友人とのガールズトークから生まれた話です。

結局大人の男性はいいよねという意見にまともりました(笑)。

付き合い始めた頃って一番幸せな時期であり、一番不安な時期でもあると思うのです。

好きだからこそ…っていうものが少しでも伝わっていたら嬉しいです。

不満と葛藤が 混乱と悪夢を連れてやってくる

想いが通じたばかりの恋人は 幸福でなく倦怠を感じるものなの？

物分かりのいい彼女になりたくて 今日まできたけれど

最近の私 あなたより私のこと理解していない

仕事と私 大切なのはどっちかなんて

そんな質問 ばかげてる

だってあなたは 仕事と夢を愛する人だから

久し振りのデート 甘い余韻もなく

あっさりとした見送り じゃあねと振り向かない前の彼と 比較し

ては空しくなる

「前の彼はね…」 出かかった言葉閉じ込めた

傷つけちゃいけない 傷付きたくないから

それからずっと わからなくなってる

あなたと共有できる 楽しいという感情

いつからか楽しいと感ずるのは 無二の友との約束事

確めあつたことはないけど ありのままを受け入れてくれる

友達みたいな関係 望んじゃいけない

できることなら 友達になりたいよ

好きな人に会いたい 知りたい

それはまだあるから 落ち着いてきただけなのかな？

面倒臭がらずに聞いて もっともっと知りたいから

胸のドア閉ざしてないで リアルな音で語り明かそう

Water jewel(前書き)

魔女の手によって人魚に変えられた彼女をもつ主人公の話です。  
彼女が憤怒しないのは、いつも会えなくても彼が傍にいるからです。

Water jewel

魔女の怒りに触れた君は 人の姿を奪われた  
それまでは 平穩に暮らしていたというのに

君が変わってしまったことよりも 命を残してくれたことがまだ救い  
そう思う僕を 怨んでくれて構わない  
自由と引き換えに 植え付けられたひれ鱈

大地から離された君は 今や海を統べる

僕は水の中で暮らせない

君は地の上じゃ生きれない

唯一の逢瀬 君が水面に身体を委ねる夜明け前だけ  
安らかな眠り 略奪されて

桜色に染まる指先 もう二度と物を掴めない

愛を伝う唇と視線 時は波とともに消えてゆく

ふたつのアメジスト 悲しげに光放つ

朝焼けを焦がしながら 煤を纏すった魔女が囁いた言葉

「人と獣 交わりし時を同じくしても

相容れることは 想像できない」

そんな事態に 誰がしたというんだ

怒りに震え 握り拳を形作る

諫めるかのように 僕の腕に触れた

冷たい感触 人ならぬ腕はあまりにも優しすぎる

相応しい言葉 見つからなかったのだろう

細い両の腕で 抱かれていた

意思を持たない涙 海へと帰る

水面に浮かぶ 宝石の如く光放つ

recover (前書き)

失恋したばかりの女性に恋する男性のお話です。テーマは学生みた  
いな青い恋。

教室の情景を書きたかったんですが…。

recover

シャープに広がった傷跡 まだ痛くて泣いてるの？

美しい景色 愛しいと感じた心

全否定されたら 意義なくなったみたい…

窓際で君は静かに 諦めるように呟いた

悲しすぎる横顔 美しくて

気の利いた言葉 何も言えなかった

不謹慎でごめん だけどいつでも気にかけてる

気付いてないでしょう？雲で包んだ 太陽の気持ち

そんなことどうだっていい 君の悲しみ小さくなるなら

いつでもどこでも 身体ひとつで飛んでいこう

君の涙 早く乾くといいな

あの日と同じ夜 また思い出して泣いてたの？

丸くなった感情 矛盾した寝顔

何となく 幸せそうに見えるけど

僕の間違いかな？

彼との楽しい思い出 ロードショーしてたりなんて

あれこれ考え込んでたら 顔をのぞいてきた彼女

これからはね 意義を持って生きていく

誰かと恋しても 嫌な所受け入れられるような 素敵な人と

好きになっても 褪せないように

僕の前だからといって 無理して強がらなくていいんだよ

いつでもどこでも 身体ひとつで飛んでいくから君の涙 乾いてい

たらいいな

e a s t s o r r o w (前書き)

今回は男女の心の繋がりを書きましたが、それが友愛・親愛だっていいのです。

当たり前の日常がひっくり返った時、人との絆はこんな時発揮されるのだと思いました。

e a s t s o r r o w

穏やかな時間と 光を奪った光景

瓦礫から覗く 月明かりさえ冷たくてナイフのよう

温かい言葉なんて 今は力を持たなくて

寧ろ素直に受け取ることさえできない

他人の幸せを見るたび 悪魔が住み着いて

誰彼構わず 爪立てて傷つけてしまう

それでもあなたは 二の腕で私を包む

荒れ果てた地で 穏やかな笑みを浮かべながら

いつしか心の涙は枯れ果て 労りの言霊に涙が流れた

悲しいわけじゃなくて 嬉しいわけでもなくて

あなたの腕が 私の中の哀しみと怒りを奪い

生まれてはじめて 温度の意味を知ったのです

私にまだできることがあるとするなら 求めることだけではなくて

あなたの施しに 無償で応じよう

元に戻すのは 数年後になるけれど

私はもう 不の字は抱かない

梅と桜が溶け合う頃 皆で抱き合おう

「また今度」と言わずに 今すぐにでもおいで

祈ってどうにかなるなんて思ってないけど 今の私たちには必要だから

今日と同じ日が 明日もやってきますように

a childhood friend (前書き)

これまた片恋です。

彼女がフリーになったにもかかわらず、彼女の弱みにつけいるようにシャイ且つチキンな男性が主人公のお話です。

a childhood friend

顔を合わせば いつも憎まれ口ばかり叩いてる

いつも頭から離れられないくらい 好きでたまらないのに

口に出せないのは 天の邪鬼な俺とクラスメイトの恋人って肩書き  
の君の所為

彼に見せてるのは特別な笑顔 胸が締め付けられて痛い

君の愛故の贈り物 身に付けた冬の装い

「あんな男やっめとけよ」 言えるならとつくの昔に關係進んでるはず  
過ごした時間だけなら 彼には負けていない

でもとびきりの笑顔前にしちゃ 負けたのは俺の方

悪魔に囁かれても 今は衝動のままに動けない

あれから半年 關係解消したと噂で聞いた

いつもの憎まれ口 いったい何処へいった

全然冴えなくて ただ肩を並べている

「ざまあみる」なんて 思っているわけじゃないけど

悲しい思いするくらいなら 恋なんてしなきゃいいのに  
いつだって人を 傷つけては癒す

この俺だってそうさ 叶わないのわかっていながら

この恋にしがみついている

今求めているのは 「慰めて」ではなくて

「優しくして」でもない

言葉は何もかけられないけど ただ傍にいよう

**m a y b e   d i s l i k e (前書き)**

女性の短所を風刺したお話です。

私自身噂話や集団行動が好きではないので、今回こんな話が出来上がりました。

ですがすべての女性に嫌悪感を抱いているわけではないので、誤解のないように…物を書いている以上は仕方ないことなのかもしれないかもしれませんが。

maybe dislike

作り笑顔のスキルは一級品 特に不幸話には目が無い  
「ひとりで。」の勇気持てないくせに 群がれば武器得たかのよう  
に強気

ハイエナよりも ライオンを選ぶ

日常に浮いた 欠片を広い集める

濁点のつく言葉で 賑わうランチタイム

溶け込んだように 振る舞ってはいるけど

苦手なんて生温いもんじゃなくて 僕の細胞に障るんだ

強要されて動く 強要されて共にする

収容の自由なんて 既に言葉と形を変えている

表の顔は 清廉潔白のマリア

友達みたいな顔して 面倒見いいけれど

好きの反対の人には 笑顔で容赦なく鉄槌下す

勿論仲間を呼び集めてから

手にした情報の もとの場所なんてどうでもよくて

一度広げれば 水のように止まらない

同じ性で どうしてこうも違うのだろう

ゴシップなんてどうでもいい ニュースソースなんてどうでもいい

信憑性有無関わらず 興味などない

ライオンを演じきれない 寂しがり屋のハイエナ

狼になれない 気弱な羊

きつとそうなんでしょう？

一人でいるのが 恐ろしい？

独りで夜明けを待つのが 怖くてたまらない？

僕にとつては 解せない話だよ

僕もあなたも 生まれてくるときは一人だというのに

**s h a d o w l o v e s m e d e e p l y (前書き)**

恋人と幸せな日々を送っていた女性が突然彼に振られたことにより失望し、目が見えなくなり自分が作り出した幻影の男性とくっつくというお話です。

ツピーエンドとバッドエンドの境目のエンディングを目指しました。

shadow loves me deeply

ウエディングドレスの壁紙に 切り抜いた海辺を貼り付けてある  
鮮やかな青は褪せることなく 虹のように輝いている  
何人にも侵されぬ 美しいままで  
ただこの目は暗闇しか見えない 光と色が見えない  
ただ感じられるのは 光の眩しいまでの温度  
あれは幸せに満ちていた七月 愛する人の幸せを呪ってから  
私の目は盲目なまでに 暗闇を愛した

嵐のように突然のお別れ 太陽は冷たくなり  
人も海も浜辺も あなたすらも灰色になった  
拒絶するように瞼を閉じたら 寄り添う夜色の世界  
怨むべきは彼でもなく 私自身だった  
蛇のように絡み付く影 心許す存在のない私に  
振り払う勇気などなくて 差し出された選択肢はひとつだけ  
選べないなら 受け入れよう  
一度目覚めたら なかなか消せない悪魔の感情  
お情けで人の形を成すのね でもできれば対等の立場がいい  
私にはお似合いなのかもしれない 無意識に口角上げて  
迷いなく 何らかの情で作られた首に縋った  
あの鮮やかな青 もう二度とこの目に映すことはないだろう  
頭の中だけで上映される 染まる前の私のフィルム  
虹のように輝いている  
何人にも侵されぬ 美しいままで

## 天地階級（前書き）

会社における上司と部下、若しくは先輩と後輩のお話です。

「変化のない日常 安心を覚えているんだ」とありますが、私個人の考えとしては逆です。

変化がないことは素晴らしいことであると同時に恐ろしいと思っています。

## 天地階級

悪事働く前から 膝折り謝罪態勢

屈服させなきや 気に入らない

力任せのコントロール レンズ曇っても好きになれない  
とびきりの笑顔 裏切るためのシリアルなんでしょう

あなたの前で いい顔を演じているわけじゃない

媚び性 そういふ見方ができるなら

長に媚びてる 事実を認めてしまえ

損得勘定 期限窺い

そんなあなたとは わかり合う努力さえ無駄に思えて  
必要以上 関わりたくないんだ

迷う隙なく 即刻否定

ならなせいつも 長の傍を離れないの

きつと言いつつ 権力のシステム暴かれちゃ困るから

本人を目にしちゃ 笑うしかできないのは

かわいそうじゃなくて 勇気が欠如しているだけ

皮肉に皮肉を重ねて 今告げようか

押し上がるうなんて 思っちゃんない

変化のない日常 安心を覚えているんだ

だからもうほつといてくれ 精神浪費するのはもう懲り懲りだ

組織（こく）に滞在（こく）選ぶなら 機械の心になるしかない

零れてしまいそうなら グラス 飲み干したら一時考えるのはやめにし  
よう

s a m e s k i n (前書き)

ネタのソースはニュースです。

曖昧で都合の悪いことは隠し、困窮を味わうのはいつも力なき人々だけ。

今回はかなり風刺色が強いお話になっています。

s a m e s k i n

皮膚の下の構造は 認めたくないけれどよく似ている

いつだって害のない 安全な手段を買い求める

誰がどこで嘆き苦しもうが こう答えると教わったんだらう？

「申し訳ありません。」 綺麗事を聞きたい奴 どこにいるっ  
てい  
うんだ

愛と平和を適当に掲げ 保身の為に理性を殺す

天に近い上の立場 優越感に浸って安心してるんだらう？

崇拜してるわけじゃなくて 堪えに堪えているだけ

気を付けなよ いつかは飼い犬に喰われて命取りになる

『隣人を愛せよ』 神の言葉に初めて背いた

どうしても彼を受け入れられない

金銀財宝に囲まれ 民が苦しみに喘いでいる中

豪華絢爛たる暮らしに守られる彼が 正義だと仰るなら罪人の烙印

を押されても構わない

思い上がるなよ 今の地位を維持できるのは今だけだ

限界を超えた時は 口聞かぬ獣となろう

そして青空を破り 大地の色を塗り替えよう

何も争いを愛しているわけじゃない

言葉が通じないなら 理解し合う手段がないっただけ

皮肉だと思わない？ この体に流れる血

色も粘度も同じなのに 分かりあえないなんて

a f f e c t i o n a t e l y (前書き)

遠距離恋愛のお話です。

明るくて未来のある話は書いていて楽しいです。

自分の作品を改めて読み返してみると、びっくりするくらい両極端。  
ラブラブもあれば、浮気・片思いもあり。

なのでたまにこういうお話を書くとき、心が温かくなります。

a f f e c t i o n a t e l y

時は僕らを試した 遠くなった距離は愛に試練と冒険を与えた  
限られた時しか過ごせないから とても大切に感じられるんだ  
約束した日の便で 会いに行くから待っていて

懐かしい地に着いたら 出迎えてくれる変わらない笑顔  
時間だけが流れても 君だけは変わらないままだね  
皮肉じゃなくて 制服着てた頃と同じでいてほしい  
恥ずかしそうに照れながら 「何もないけどどうぞ」

大きくなったトレンチコート 部屋いっぱい広がる柔軟剤  
何にも目を移さず 待っていてくれたんだね

何も言わないけれど 君を浮かべるだけでとても愛おしく思えてき  
たよ

ランチと土産話で腹を満たした

遠くなった距離は 心の距離を短くさせた

じゃれあっていたら いつの間にか睡眠モードに突入してしまった  
らしい

「折角の日なのにこりゃないよ…」 君の寝顔がネガティブを吹き  
消した

髪を撫でると寝返りうって 僕の名を呟いた

離れていても また帰ってくるから

距離と時間が壁になっても この愛だけは手放さないから

## character making(前書き)

今回は「見た目で人を判断する」がテーマです。

だいぶ前のことになりましたが、mixiニュースでキャラクターを演じることに疲れている人がいる、というのがあったのですが、元ネタはこれです。

されたら嫌だっと思っていてのに悲しいことに人は外見で判断してしまう。

そんなことを私自身も感じているし、知らず知らずのうちにやっってしまうのですが、私なりに感じていることを書きました。

## character making

冷静沈着 上辺だけで申し訳ないけど

眉目秀丽 重ね重ね申し訳ないけど

目標だけは高設定 してるつもり

パッケージしか見てなくせに わかったような口ぶりはやめて  
褒められるたびに 見えそうになっただら塗り隠していた  
らしくないって 言われるだろうから

でもね私だって 言うなればそう ただの人間なのです

ガンメタリックの仮面 私の中の少女を守る盾

人目につかないように脱いだら 情けないパーツが映った

恥ずかしいから隠す 裏切りの種にしかならないから隠す

清楚を演じるのも疲れたから 汚れない夜に染められてしまいたい

優しさなんて要らない 同情なんてもつと要らない

今は母性に触れるだけで 気が狂いそうになる

ただ抱き留めて欲しかっただけに このままじゃ霧もやに吞まれて  
しまいそう

こんな姿を見せたら きつと裏切られたって唾吐かれる

演じる時間が長過ぎて 化けの皮はいつかきつと剥がされる

だけど私だって あなたと同じただの人間なのです

## 雨鏡心身（前書き）

他人がイメージするキャラクターを演じる女性と、彼女に思いを寄せる男性のお話です。

ベースはcharacter makingとかぶっています。

ですがこちらは恋愛の話になっているので、別物として捉えて頂けると嬉しいです。

## 雨鏡心身

白いものはすぐ汚れる 悪戯な雨が後悔と時間を洗い流した  
びしょ濡れで見えなかつたけど 抑えてた涙一気に溢れたんだね  
タフな肉食演じてたのは らしくないって言われたらどうしていい  
かわからないから？

それとも壊れそうな自分を 守るための外壁だったのかな？  
期待なんて最初からしていない そんな冷たい視線だった  
こつちへおいで 金属で塗り固められた翼を脱がせてあげよう  
受け入れることが難しいなら 影のようにずっと付き添うよ  
がむしゃらになるのが格好悪いんじゃない そんな君は眩しいほど  
に美しい

メディアが真似たパレットの仮面 僕の目にはクローンにしか見え  
ないんだ

万人に愛されるなんて 神ですらもできないことだって早く気  
付いて

役柄を脱いだ夜 色を捨てた肌

煌めきは<sup>きり</sup>ないけれど この世の何よりも愛しくてたまらない  
睡眠に誘惑された時だけ シーツを抱き枕にして子供の表情<sup>かお</sup>になっ  
てる

目覚めてもそのままできてくれたらいいのにな

## p u r i t y b o x (前書き)

恋愛ネタばかりもつまらないなあ、と思い、思いついたのが今回のお話です。

テーマは病院。

神と天使といのは医者と看護師のことです。

大袈裟かもしれませんが、きっと患者にとってはそのように映っている筈です。

白い布に包まれた部屋　純白の衣に身を包む神々  
その世界に足を踏みいれたら　「郷に従え」

ベッドに寝かせられ　拘束されて動けない

頭の上で声がする　金属音が響いて背筋が凍りそうだが注射器を持つ  
華奢な手　迷いなく針を皮膚に食い込ませる

危機感吸い取る睡魔　思考と意識を奪われシートに身を委ねた

傷口の時間を戻す　科学を用いたマジックはまるで魔法のよう

笑顔の来訪者　機嫌よく帰ってゆく

拘束から解放され　自由になったこの体

体が軽くなっているような気がする

眠っている間に　何が起こった？

神に仕える天使は微笑みを浮かべたまま　カルテを抱いて消えてい  
った

痛みや不快　取り除いてくれたのか

痛みを感じる前の状態に戻ってるのは　持ち主である僕が一番わか  
っている

神に問い掛けても　種明かしはしてくれない

「人には傷を治す力がある　ただ手を添えていただけ」

微笑して退室命令を下す　きつとそんなもの嘘だ

だけどその嘘に　今は騙されてやるのも悪くはない

## blood drop(前書き)

今回は魔術士の話です。

女性を攫う所らへんからRにしようか、健全にしようか悩みました  
が健全の方向に辿り着きました。  
タイトルは魔術士の涙のことです。

blood drop

皮膚の奥に眠るのは ルビーのような輝きを放つ紅い滴

満月を見た狼のように 気が狂いそうになる

灰になって蒸発して 消えゆく運命を辿るなら

私が美しい宝石にしてみせよう

私は魔術士 物質を変化させることくらい造作もない

形にしたらケースに飾って 埃の欠けらにさえ触れさせない

手に入れても欲望は満たされない 玩具を強請る<sup>ねだ</sup>子供のように

待っている時間はない この私も時間の中に生きる 生命の器を与

えられし人間という名の魔物

月が黒いベールで包まれたら 標的を探しに旅立とう

無邪気と無垢はドレスコード 装飾品に引けをとらない

くだらない話に微笑む 甘露のような声

平凡な世界から 連れ出してあげよう

獲物はいつも恐怖に彩られ 脅えていなければならぬ

なのになぜ揺らぎもしない 捕らえたつもりなのに捕らえられてい  
る？

「ただ淋しかっただけなんでしょう？」

憐れみの指先が頬を滑る 流れる紅い涙はまだ人である証なのか

滴は石となり 地面に紅い華を添えた

carbonic acid cafe (前書き)

喫茶店の女性店員とお客のお話です。

タイトルの一部でもある炭酸は片思いを表しています。

詩の中に出てくるソーダ水も同じような意味があります。

片思いでもどろどろとしたものではなく、ただ目で追っただけの害のない片恋です。

carbonic acid cafe

硝子に映るミステリアスな表情 好むのは砂糖を入れない純粹な紅茶  
隣に座る女性<sup>ひと</sup> ソーダ水がとても似合う

あなたとは正反対の 素敵な恋人ね

いつも顔が違う もしかしなくても新しいもの好き？恥も考えずに  
騒ぎ立てる彼女を クールな流し目で見ると

愛なんてこれっぽっちもないのに その気になってしまおう

空席ならば 今すぐにでも滑り込むのに

だけど叶わない あなたの喜ぶ顔を見届けるのが私の仕事

旬の歌い手のキャッチーなミュージック 仲間に入れてと横殴りの雨  
独りバスを待つ 濡れた足元を見て憂鬱になる

これは何かの偶然？ 変わらないのミステリアスな表情

どうせ気付いてなんかくれない 無意識に見つめていたら無言の笑  
顔をくれた

私はマネキンのようなメイド ただ仕事をしていればいい

そんな私を覚えていてくれた だけどこれ以上期待させないで

恋い焦がれたって 夢の中で会えたって

私はあなたの横で 微笑むことはできはしないから

## Wind heaven(前書き)

今回は愛と死をテーマにしました。

主人の死を見届けたくない故に自ら死を選ぶ家族である動物の話です。

## Wind heaven

風の国に旅立つとき 一對の雀が藤の花を銜えて現れるという  
拒否の選択はない 無言で受け取った花を簪かんざしにした

恐怖の感情はない 悔やむとしたらあなたの傍を離れることだけ  
時間が流れている限り 永遠の魔法の効果はいつか切れる

あなたを見送るならば 私が先にいこう  
別れることよりも 見送る方が辛いから

大好きな花に包まれたいけど 笑顔を曇らせるだけだからこの体ひ  
とつでいい

苦しい選択をした私を許して 依存を通り越すほどに愛している  
上目遣いに見る私を 優しく撫でる

甘えて強請り擦り寄る 体温を持つカーテンに抱かれ眠った

ゆっくりと腕をすり抜け 愛しき主人の瞼に無言の別れを告げた  
もう会うこともないだろう 花の蜜のような日々が風のように消え  
ていく

風が残り香を消し去り 菊を敷き詰めた箱船を運んでくる  
もうじきこの世界を出てゆく あなたとの甘い夢を抱いて  
メッセージのない花の文 届く頃に過去を思い出して  
いつか同じ場所で眠ろう 今はあなたの心の中で

## Wind heaven (後書き)

いつか忘れましたが読んだ本に、飼い主の死期もしくは病気を感じ取ると、飼い主を見送りたいくないがために自分が病気になり死んでしまうということが書かれていて、今回はそれをベースにしました。藤の花の花言葉には歓迎しますというものがあります。

そしてタイトルにも使いましたが、風の国とは天国のことです。一對の雀は天国へいくための使者。

以上のことを踏まえて考察すると、どちらかに死期が迫っているということになります。

主人の笑顔より死に顔は見たくないため、彼女（作中では何らかの動物）は自分が先に行く（逝く）ことを決意します。

家族のような愛し愛されのような関係なので、どちらか片方がいなくなることはお互いに辛い事を知っています。

だから何も残さず彼女は去るのです。

『風が残り香を消し去り』とありますが、これは彼女に対する自然界からの温情です。

今回は愛と死をテーマにしましたが、私の中ではネガティブなものには分類していません。

彼女は長期に渡り主人を見守ってきました。

その役目が終わり、休息なさいという意味で藤の花とともに使者がやってきました。

つまり死後の世界へ行くということは絶望ではなく新たな旅立ちなのです。

特に彼女は自然界と多少は関わりがあるので、抗うことなく受け入れます。

また同じ場所で眠れることを信じて。

## 檻愛

薔薇の鎖はマリアの両腕 優しく抱き上げてみせよう

光を拒絶した部屋 時の進み方なんてもう忘れてしまったよ

外の世界なんて 何も知らなくていい

醜いものだらけの視界は 君の心を淀ませるだろう

好奇心旺盛な唇に ひとつだけの真実を教えてあげる

鳥籠の中は少し狭いけれど 僕ら以外の人間は存在しない

美しき愛で満たされた 禁忌が美徳のこの楽園

歳も性も生まれも宗教さえも 愛し合うのにいちいち理由がいるかい？

禁じられれば禁じられるほど 僕は愛を貫きたくなる

正当な道が正しいと説き続けるけど 大多数の答えになんて耳を傾けない

傷付き傷付けられ 罪で汚れたくないだけなんだろ

私利私欲と自分自身が一番大切に 血が繋がっていようと他人と変わらないうらなう

あんたが捨てた縁を <sup>えにし</sup> どんな手段を使つても守つていこう

だからもう構わないでくれ 僕らは僕らだけの世界で生きていく  
もう二度とその瞳に 悲しみの色を映させはしないから

c o n v e r s a t i o n

「流行の服を着ても 冴えないし変化ない」

そう思えたら上出来 今の僕は焦りすぎて見えないんだ

メディアや雑誌は強かだね お似合いなんて選ばれた人だけ

君の隣はもう埋まっているから 僕が選ばれることはないだろう

些細な願望に 悪魔が狙いを定める

暴走してしまう前に 視界の入らない場所に消えてくれ

誘惑に弱くなってる僕には もう止められない

標的を見つけた 今度はもう機会を逃がさない

最愛の彼女に似た少女 代替だとしても愛している

「最愛に手を出さない事に 感謝してほしいくらいだ」

下卑た笑いが 耳鳴りのように響く

あれと共存するようになってから 作り笑顔だけがうまくなった

感情が壊れ 脅えているというのか？

いやそうじゃない 孤独に負けそうになった時からそこにいてくれ

てたんだな

もう逃げも隠れもしない だから心室を開け放ってくれ

傷口から涙を流す空 もう曇りも湿りもしないはずだ

僕の中で眠れ 我が半身よ

## c o n v e r s a t i o n (後書き)

今回のお話は自分との対話がテーマになっています。

恋愛はあくまでもつけ足しのような存在です。

作中に出てくる悪魔とは決して他人の意志や意識ではなく、主人公の黒い意識や意思です。

二面性は誰でも持っているものなので、それに戸惑いながらも前に進もうとする人間性を感じてもらえたら嬉しいです。

priority

君は二番目が好きだったね 何でもかんでも統一してみせた  
一番にしてあげれない僕 申し訳なくて謝りそうになるたび  
声を押し殺して 悲しみの笑みを浮かべた

たまには猫を真似てよ 現実的なオーダーならいくらだって応える  
のに

もしかして期待すらしていない？ 不恰好が代名詞の僕だけど  
君の前では意地を見せたい このままじゃ君のなんなのかわからな  
くなる

明るい声と一緒に 森の宝石を火の中に放り込む  
映り込んだ情けない顔が揺れてる まるで遭難して絶望してる旅人  
みたいだ

いつだって甘い時間の前に 黒い壁の翁おきなが邪魔をする

「いい加減にしろよ！」 小心者の僕にそんなことは言えない  
愛を計るわけじゃないけど メールも電話も減ってる気がする

僕が電話したら対応してくれるのは いつも同じトーンの留守電で  
思い浮かぶのは どのルートも最悪の結末

家に帰ればまた いつものように愛しい人がいる  
その笑顔の裏側を想像して 思わず作り笑いが引き攣つった

「あなたの幸福と不幸の半分は あなたのものですあり私のも  
気兼ねする必要なんてないの 私の一番はあなたの帰る場所を守る  
こと

二番目に想ってくれるだけで 私はとても幸せだわ」  
最上の愛のかたち 君との未来に捧ぐ

priority (後書き)

今回は恋と仕事の優先順位のお話です。

仕事をほったらかして恋に走りたい彼ですが、それでは生活できないし頭を悩ませています。

付き合った当初と比較して電話やメールの回数が減り、少々不安になります。

彼女は「自分が家を守るから、あなたはあなたに与えられた仕事をしてほしい」と思っています。

ちなみに最後の台詞は彼女なりの愛の告白です。

今の時代女性が家を守るといふのは、少し古臭いように映るかもしれませんが。

解錠とともに開場 外の世界から子供たちの声が聞こえる

檻の中は不安と恐怖が存在しない だけどサバイバルを知る身には物足りない

人間社会ではこれが普通らしい やはり環境が違えば価値観も異なる  
寝床や食事の確保 神経質になることはない

与えられた場所で生き 食べ住み時が迎えにきたら逝く

支配されているとはいえ 捕らわれていることを忘れてしまいそう  
満たされないというのは 人に染まってしまったからか？

贅沢と欲望を食らい 知性を秘めた強かな生き物  
此処に来るまでは嫌っていた 憎んでいた

その身を粉々に切り裂き 我が血肉にしてやりたいほどに  
だが子供たちの笑顔を見たら そんな気持ちは失せてしまったよ

太陽が恵みをくれるというなら 子供たちは癒しと元気をくれる

種は違えど皆同じ 笑顔の花がとても愛おしい

この勇猛な姿を その透明な宝石に映しておくれ

見世物なんてとんでもないが 報酬の笑みを拝むことができるなら  
悪くはない

z o o · s c u r e (後書き)

今回は動物園の動物視点のお話です。

人間に捕らわれている彼らですが、檻の中に捕らわれていない人間の方が不自由なんじゃないのかなあと時々思うのです。

特に社会の中で。

自然の中で過ごしていた時、人間を嫌っていた事が描かれています  
が、それは彼らにとって人間は害そのものだったからです。

つまり彼らはハンターの類の人間しか知らなかったのです。

でも子を持つ親の動物は種は違いますが、子供の笑顔を見て癒され  
てしまうわけです。

その点は人間も他の動物も一緒なのでしょう。

## 傀儡進行

鏡の中の乙女たちの色は まるで同化しているように均一になり  
現<sup>うつ</sup>の世界の少年たちは 名称で識別された彼女らを女神と呼び愛す  
るようになる

それでいいのか？ 踊らされていないのか？

僕はただの音狂い 決して心を動かされるもんか

旬を過ぎた果実は 値札を奪われ風にさらされる道を辿る

そして新たな時代は運ばれる そうやっていくつもの季節を見送っ  
てきたけど

僕は流されはしない この指で心で選択する

ほら見る 僕がノートに描いた世界が今目の前にある

嗚呼 選択肢を選ぶ思考は もっと狭くなつていくんだらう

誰が何処から僕らを操る？ 生けるマリオネットは輝かしき未来を  
夢見る

貫徹よりも平安が大事？ そうして個を殺した

人と違うことの何が怖い？ 夜に現れる影を恐れたって 何も生ま  
れはしない

最後まで彩り続けて見せる 君だけが放つ色は世界を魅せるだらう

世間の風の流れじゃなく 君の体内時計で感じればいい

強き意志があれば 揺らぐことも流されることもないはずだ

## 傀儡進行（後書き）

今回は個性と流行を風刺したお話です。

私は正直なところ流行りものにとびつくことはないですし興味ないので、特に日本人はそういう傾向がありますよね。

そういうのってどうなんだろう、という私の考えが今回形になりました。

以前にも一度書いたことのあるテーマなので、過去の作品と比べてみると面白いかもしれません。

## 聖式兔葬

満月に傳く兔が今宵も見送る 煙突から舞うは旅人のための子守唄  
涙と叫びを抱きながら 時間は無情にも器と魂の繋がりを断つ

罪よりも悪よりも この世の中で最も美しく酷い  
神が定めた絶対的な法律 誰も逃げられないだろう

どうか暴言をお許し下さい 私と彼らを創りし愛しき方よ

悲哀は夜空を染め 灰色の雲に霧がマフラーのように寄り添う

大地の記憶と歴史を消された魂は 無事に安楽の地に辿り着けるの  
でしょうか

悲しみが雨のように染みて 不眠の夜を重ね双眸は紅玉と化す

純白と純潔を纏った体 とても青白く地上で色を映すことはもうない

孤独はきつと淋しくて辛いだろうから 寝床を花畑にして贈ろう

波打つ炎に包まれて 新しい姿に生まれ変わる

箱の中は暗く冷たい 睡魔との恋に落ちたらもう煩わされることは  
ないだろう

痛みを和らげることが叶わないなら 雫で泣き濡れた頬を癒してみ  
せよう

旅立つ者を見送り続け 自らは永遠を跨ぎ生きる

青き惑星が燃え尽きるまで 解放されることはないのですか

満月は何も言わぬまま美しく輝く 迷子は道標を欲しているだけな  
のに

## 聖式兔葬（後書き）

タイトルの読みは「せいしきうそう」です。

今回のテーマは「生と死」です。

先日月が満ちてとても綺麗だったので、このお話ができました。月とくれば兔は外せないな、と思ひまして。

シチュエーションとしてはかなりダークなものだと思っています。

ですが私たち生きているすべての人・動物にとって切っても切れないものだと思うので、生と死について考えるきっかけにもなれば嬉しく思います。

mind self - support

行動起こす前から逃げ腰 諦めるなんて容易く口にするな  
自分を暗示にかけた者が勝ち 良し悪し関係なく言葉は夢に繋がる  
だってそうだろう？ 何度も敗れて何度も立ち上がるうとした  
疑わしい涙と嘘は 引き出しの奥にしまっておけばいい  
完全な強さを持つ者 存在するなんてことはない  
奮い立たと唄う僕も 強さとは無縁さ  
弱さを認め 敵方の犬にはなっってくれるな  
弱さに悩み 藻掻き苦しんだ果てに獣となれ

影のように張り付き 傍を離れれば不安になる  
口角上げて 薄ら笑いを浮かべている  
きっと真夜中の窓際は ネイビーとブラックのマーブルに染められ  
ている

妄言も口にすれば 地図のように浮かび上がる現実となる  
温もりを与えられたって 孤独を鋏はさみで切り離すことはできない  
血を繋ぐ人々が 恋い慕う人がいるってことが  
一時の孤独を攫ってくれる だから個性だけは見失うな 君が君で  
いることのただひとつの証明書

さあ暗示をかける 「I'm strong」

## mind self-support (後書き)

今回は精神の自立がテーマになっています。

その場の流れに身を委ねたり、何かに依存したりするのが好きではないので今回書かせて頂きました。

以前から形にはなっていたのですが、長期にわたり放置するののもど  
うかと思い、何とか書き終えることができました。

ハートナイフと硝子玉の棊箱の両方を並行して更新してきましたが、  
本格的にハートナイフを進めていきたいと思っていますのでとりあ  
えず硝子玉の棊の更新は一旦休止という形を取らせて頂きたいと思  
っています。

作者の勝手な都合で申し訳ありませんが、ご了承下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5137g/>

---

硝子玉の栞箱

2011年10月25日01時07分発行